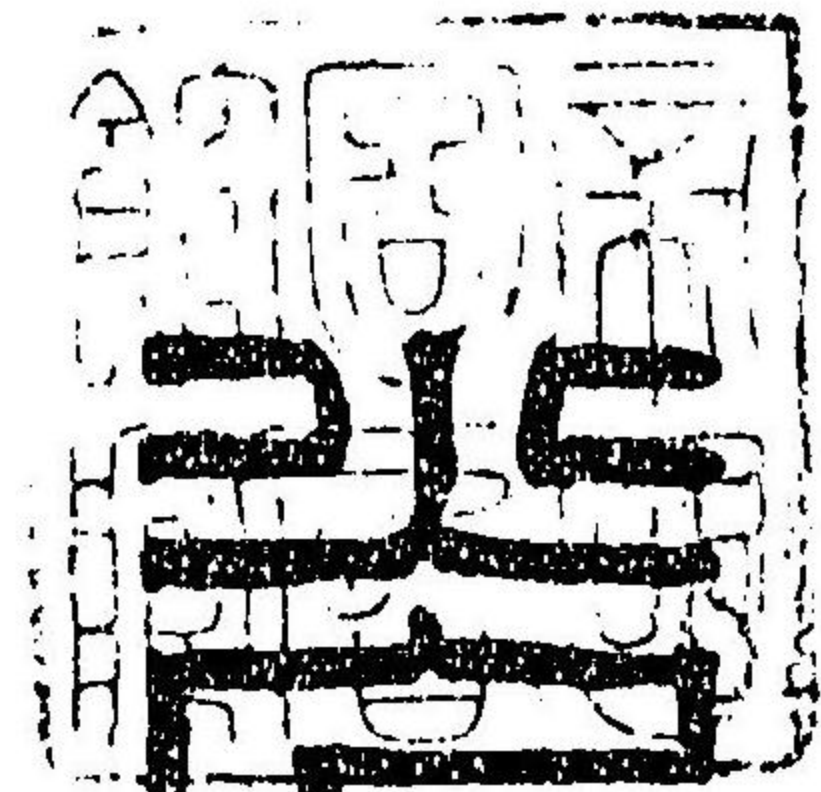


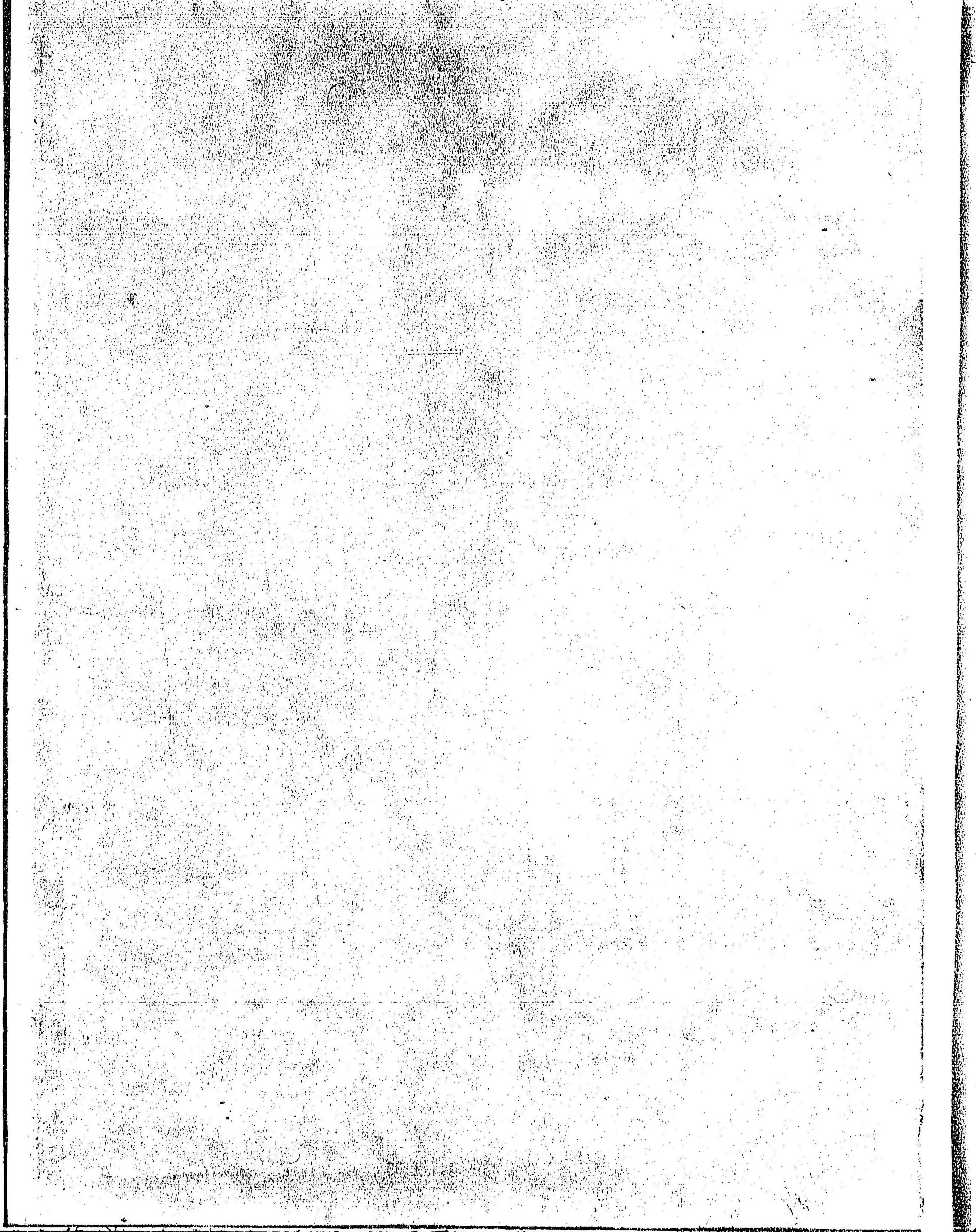
光緒通鑑集



瑞澂書翰

二

明治
37 2 24
内交



武庫郡精道村大字盧屋に在りし時兄行平及び衛府佐等の官人尋ね來りしかば相携へて其附近なる布引の瀧を見んきて之に往きしに行平これに對して先づ我世をばけふかあすかと待つかひの涙のたきといづれたかけむと詠み業平またぬきみだる人こそあらしまら玉のまなくも散るか袖のせばきに詠めること伊勢物語に見えたり茲に出す第一圖は即ち此故事を描けるものなり其瀑布岩石及び岩角に懸れる老松の如き筆致暢快にして位置配合また頗る其妙を得たるのみならず人物個々の風丰状態はおのづから能く當時の興趣を紙上に活躍せしめて餘あり殊に傳彩の艶麗にして鮮澤なる例に依りて其極に臻る更に左右二幅に於ける雄雉の雙鶏及び數羽の雛兒の描法を見よ何ぞ其運筆の磊落にして潑墨の淋漓たるや而も能く寫生の妙を曲盡し天然の眞を發揮して餘蘊なきものは實に光琳獨得の技倆にして前に古人なく後に今人なしと云ふも決して過言にあらざるべし要するに此三幅は次に出す別府氏の武蔵野及龍田山圖雙幅久松家の業平東下及花卉圖三幅對と共に光琳畫中白眉の作と稱すべきものなり

布引瀧及雌雄鶏圖三幅對(紙本着色)

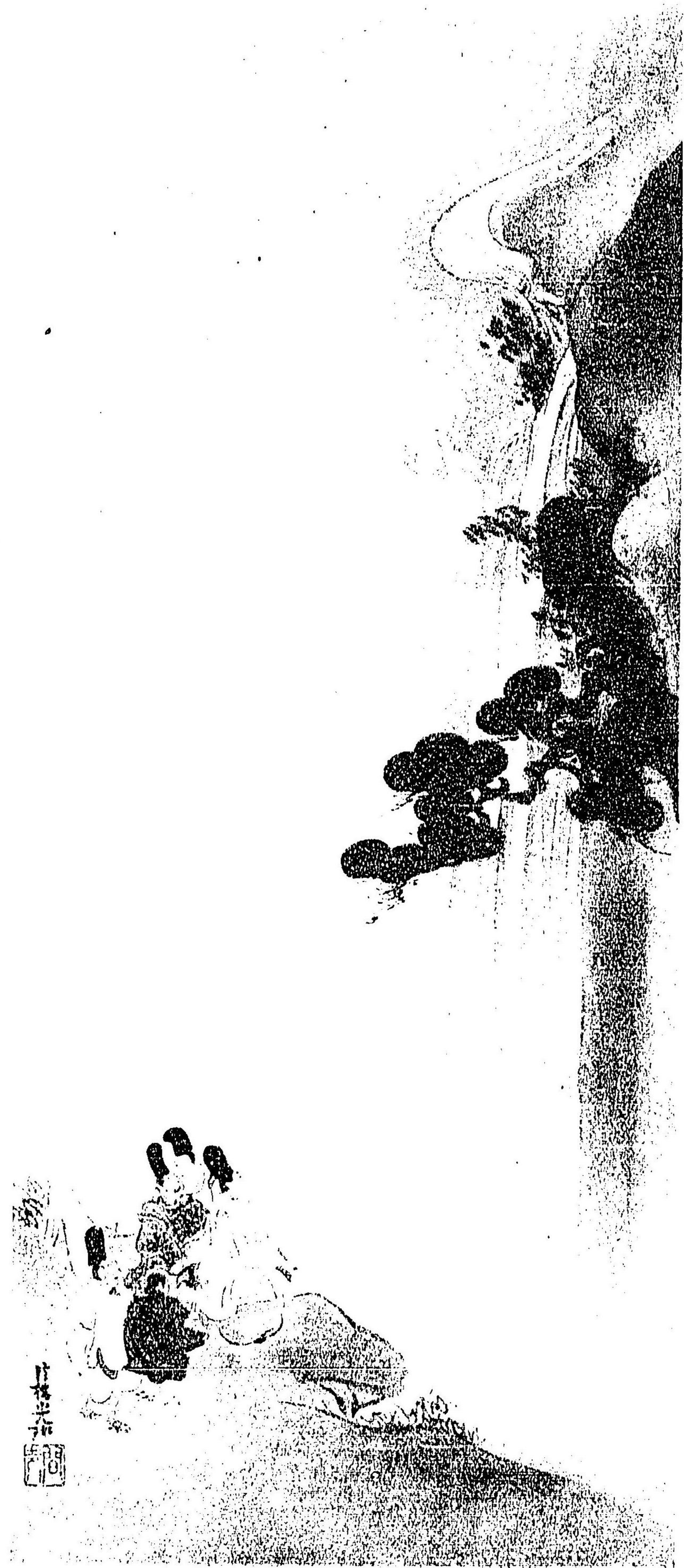
(各幅三尺七寸七分、横一尺六寸)

男爵岩崎彌之助君藏



昔在原業平朝臣嘗て攝津國菟原郡葦屋の里今の武庫郡精道村大字盧屋に在りし時兄行平及び衛府佐等の官人尋ね來りしかば相携へて其附近なる布引の瀧を見んきて之に往きしに行平これに對して先づ我世をばけふかあすかと待つかひの涙のたきといづれたかけむと詠み業平またぬきみだる人こそあらしまら玉のまなくも散るか袖のせばきに詠めること伊勢物語に見えたり茲に出す第一圖は即ち此故事を描けるものなり其瀑布岩石及び岩角に懸れる老松の如き筆致暢快にして位置配合また頗る其妙を得たるのみならず人物個々の風丰状態はおのづから能く當時の興趣を紙上に活躍せしめて餘あり殊に傳彩の艶麗にして鮮澤なる例に依りて其極に臻る更に左右二幅に於ける雄雉の雙鶏及び數羽の雛兒の描法を見よ何ぞ其運筆の磊落にして潑墨の淋漓たるや而も能く寫生の妙を曲盡し天然の眞を發揮して餘蘊なきものは實に光琳獨得の技倆にして前に古人なく後に今人なしと云ふも決して過言にあらざるべし要するに此三幅は次に出す別府氏の武蔵野及龍田山圖雙幅久松家の業平東下及花卉圖三幅對と共に光琳畫中白眉の作と稱すべきものなり

武庫郡精道村大字盧屋に在りし時兄行平及び衛府佐等の官人尋ね來りしかば相携へて其附近なる布引の瀧を見んきて之に往きしに行平これに對して先づ我世をばけふかあすかと待つかひの涙のたきといづれたかけむと詠み業平またぬきみだる人こそあらしまら玉のまなくも散るか袖のせばきに詠めること伊勢物語に見えたり茲に出す第一圖は即ち此故事を描けるものなり其瀑布岩石及び岩角に懸れる老松の如き筆致暢快にして位置配合また頗る其妙を得たるのみならず人物個々の風丰状態はおのづから能く當時の興趣を紙上に活躍せしめて餘あり殊に傳彩の艶麗にして鮮澤なる例に依りて其極に臻る更に左右二幅に於ける雄雉の雙鶏及び數羽の雛兒の描法を見よ何ぞ其運筆の磊落にして潑墨の淋漓たるや而も能く寫生の妙を曲盡し天然の眞を發揮して餘蘊なきものは實に光琳獨得の技倆にして前に古人なく後に今人なしと云ふも決して過言にあらざるべし要するに此三幅は次に出す別府氏の武蔵野及龍田山圖雙幅久松家の業平東下及花卉圖三幅對と共に光琳畫中白眉の作と稱すべきものなり





廿
九
日
画





武藏野及龍田山圖雙幅(紙本着色)

(各幅三尺八寸六分、横一尺六寸一分)

東京 別府金七君藏

光琳の畫たるや、土佐狩野の兩派を陶冶し、光悅宗達の遺法を參酌して、専ら本邦の特風を發揮したるにあることは既に述べたる所の如し、故に其畫題の如きも、之を伊勢物語等の故事に取れるもの最も多し、乃ち前に掲げたる布引瀧園次に出す兼平東下圖及び此二圖の如き、皆然らざるなし、此二圖の甲は

むかし田舎わたらひしける人の子ども井のもとに出てあそびけるを、おとなになりければ、男も女もはぢがはしてありけれど、男は此女をこそえめとおもふ、女はこの男をと思ひつゝ、親のあはすれども、きかでなんありける、さて此となりの男のもとよりかくなつゝ、井筒あづ、にかけしまろかだけすぎにけらしな妹見ざるまに女かへし

くらべこしよりわけがみもかたすぎぬ君ならやして誰かあぐべき

など云ひつゝ、つゝおにほいの如くあひにけり、さて年頃経る程に、女おやなくたよりなくなるまゝ、に諸共にいよかひなくてあらんや、はとて河内の國高安の郡にいさかよふ所いできにけり、さりけれど此もとの女あしと思へるけしきもなく、て出しやりければ、男こど心ありて斯るにやあらんと思ひ疑ひて、前親の中に隠れ居て河内へいぬる顔にて見れば、此女いさようけさうじて、うちながめて

風ふけば沖つ白浪たつた山夜半にや君がひさりこゆらむ

とよみけるをき、て限りなく悲しと思ひて河内へもいかす成りにけり

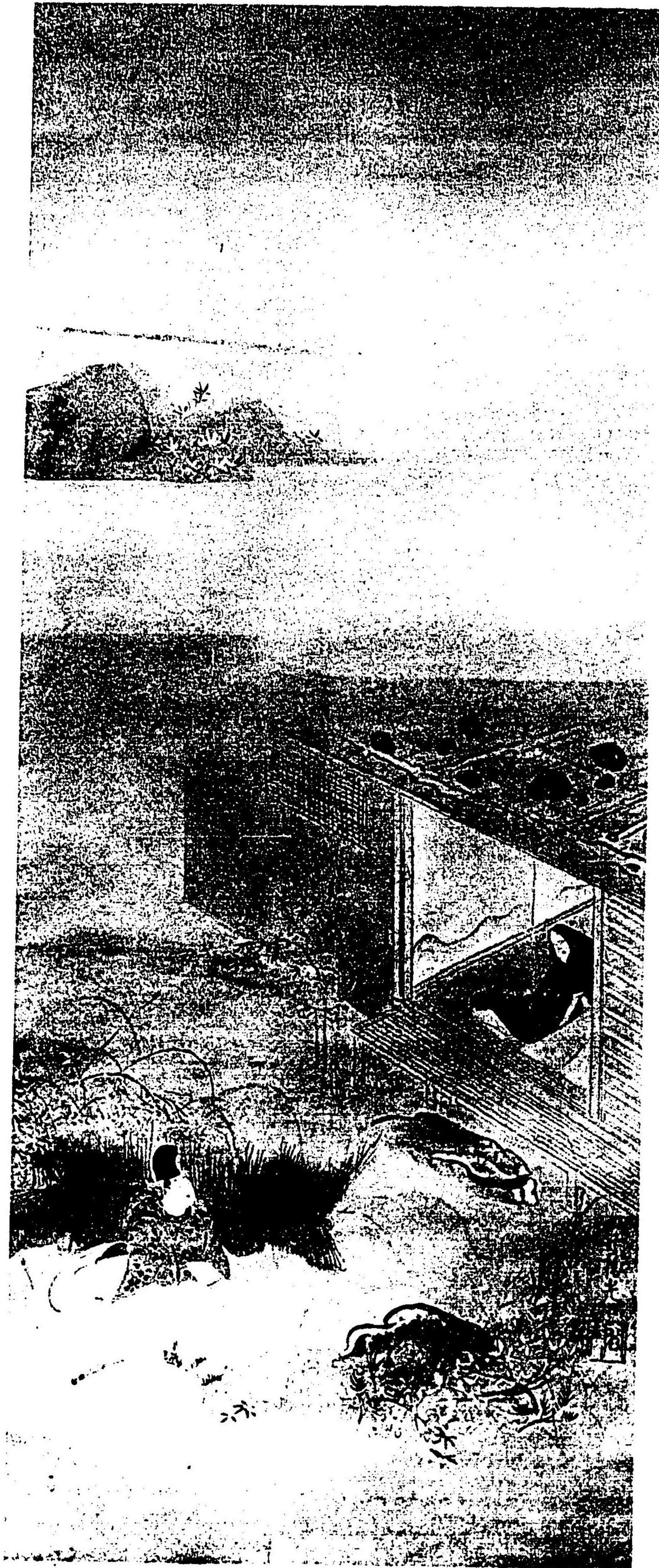
とある末段の意によりて、男が前親の中に隠れ、女の舉止を窺ふところを圖し、又淡々たる遠山に數箇の楓樹を點出して、おのづから紅葉を以て著名なる大和の龍田山なるを知らしめ乙は

昔し男業平朝臣ありけり、人のむすめ二條の扨をぬすみて、武藏野南都若草山の麓へゐて行く程に、ぬす人なりければ、國の守にからめられにけり、女をば草むらの中におきてにげにけり、道くる人此野はぬす人あなりとて、火つけんとす、女わびて

むさし野はけよはなやきそ若草のつまもこもれり我もこもれり

と讀みけるを聞て、女をば取りて、ごもにゐていにけり

とあるの意に基きて、兩個の男女叢中に坐し、數人の捕吏之を索むるの狀を寫せり、二圖ともに人物及び家屋に於ける描法頗る慎重なれども、岩石及び秋草の如きは、縦横揮灑し去て、落筆率ろ磊落なるを見る、而も兩々筆墨超逸傳染宜きを得て、意趣に富む、眞に光琳畫中の名品なり、人或は言はん、遠岑に於ける楓樹の如き、頗る其大小比較の眞を失すと、然れども、斯の如きの不自然ありて、而も畫面の甚しき不調和を感せざる所、即ち光琳の光琳たる所以の特調にして、おのづから一種幽奥の奇趣あり、夫の徒らに形似の末に拘々として、寫意の妙訣を證得せざる凡庸畫家の到底企及する所にあらざるなり





業平東下及花卉圖三幅對(紙本着色)

(各幅三尺七寸五分、横一尺五寸七分)

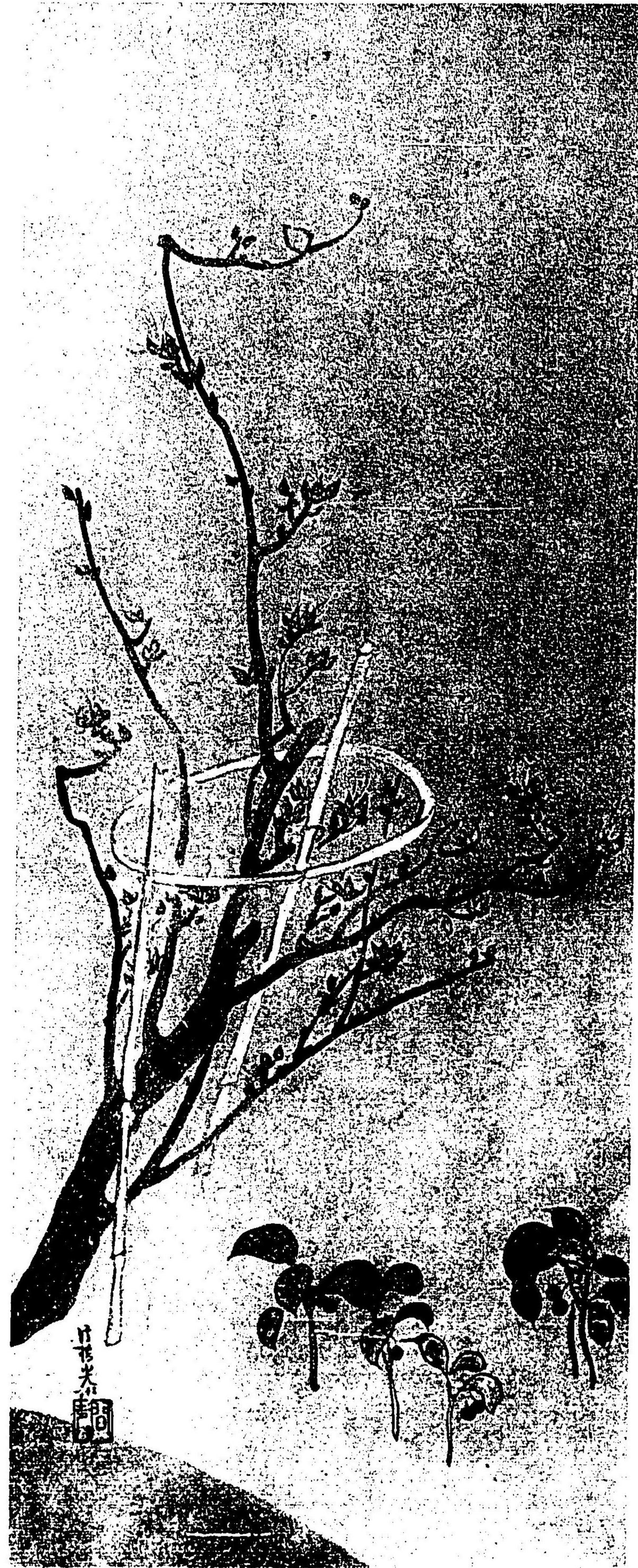
子爵久松定康君藏

茲に出す第一圖は在原業平が東に下り、駿河國に至りけるとき五月晦日なるに猶ほ富士山嶽白雪を戴けるを見て、時まらぬ山はふじのねいつとてか、かのこまだらに雲のよらむと詠みたりし故事を描けるものなり、其雲烟漠々たる間に白雪皚々たる富嶽の峯頭を描き而して下方に數根の杜鵑花を點綴し以て單月の季を現はしたるころ、殊に意匠の秀抜なるを見るべく、且つ人物及び馬に於ける描法及び彩色は前に出す岩崎家の布引瀧圖と略相似て趣致頗る深遠なるを覺う、思ふに光琳が東下りの畫を作りたるは一にして足らず其圖様また相同じからずと雖も、茲に出すものを以て最も傑作とすべし又左右の二幅一は椿に富貴草を描き他は蠟梅に數柑子を寫したるに過ぎずして圖様簡短なれども筆致流暢にして能く花木の粹を寫し、形墨豊饒にして能く天眞の妙を發揮せり

此三幅は前に出す岩崎家の布引瀧及雌雄鷓鴣圖、別府氏の武藏野及祖田山圖等と共に元來六曲屏風一雙中の物なりしことは、抱一の光琳百圖に徴して之を知るべく、而して上人の當時其圖様を撰びて三幅對又は二幅對等の掛幅に改装したるものなること、彼れの筆に成れる箱書の内容によりて之を察すべし、按此寸法の多少異なるが如きは、改装の際に生じたる自然の結果ならんのみ







躑躅圖(絹本淡彩)

(縦一尺二寸七分、横一尺九寸八分)

東京 團 琢磨君藏

茲に掲ぐるものは、僅かに一塊の土壁に紅白二株の躑躅を
點綴し而して之に配するに一條の小流を以てせる極めて
簡短なる圖様なれども其筆致頗る雄健にして豪放の趣を
帯ふる所即ち是れ光琳の真面目なりと云ふべし殊に其流
水の線條の如き殆んど模倣すべからざるの妙あり之を第
一冊に出す清口伯爵の白菊圖岸氏の蟲狩圖及び岩崎男爵
の四季草花圖等と對照せばそのつからまた別種の觀あら
ん知るべし名匠の手腕は幾何出沒の靈機を具ふることを



草花圖(紙本淡彩)

四季草花書卷中の二段

(全長一丈七尺二寸幅一尺一寸九分)

伯耆津輕承昭君藏

茲に出す二圖は四季草花書卷中より撰載せるものにして、一は燕子花水芙蓉薄海を畫き他は櫻草野芝麻等を寫せり其彩色は極めて淡泊なれども筆致輕妙暢快にして毫も贅束の痕を留めず且つ花及び莖に於ては骨法を用ひ而して葉に於ては多く沒骨法を用ひたるどころ頗る配合の佳趣を得たりと謂ふべし





月下蘆雁圖(絹本着色)

(縦三尺七寸七分、横一尺三寸二分)

武藏國 大澤久右衛門君藏

大澤氏は武州行田の舊家なり、當主久右衛門氏より三代前の祖永之助號を文華と云ひ頗る風流細事の念に富みしが江戸淺草茅町に別墅を構へ居して百花潭と云ひ、多くは此に來り住して根岸の兩華庵なる抱一と日夕相往來し親善なる交誼を結びしと云ふ故に上人が特に文華の爲めに揮灑したる所の書畫にして、現に同家に藏するもの頗る多く、且つ其鑑定によりて求めたる光琳乾山等の名品傑作を秘藏する亦尠からず而して其鑑定に關する抱一の書來は以て大澤氏の藏品に幾多の趣味を興ふるものあれば乃ち左に其一を掲げて讀者に紹介せん
拜見仕候然は二幅持たせ被下一覽仕候速上人の御短冊御かり申置候直段下直に候はば取置たく奉存候
光琳山水拜見かよりの出來も御座候得共第一名書あしく御座候とくと拜見のうへならでは眞贋定がたく奉存候直段の義は下料に御座候左様思召可被下候
此間拜見致候其角懸物は何卒私へ御謀可被下奉願上候萬々御入奉待候今日は天氣もよく梅やしきなども宜敷奉存候
七 日 大澤 雨 華 庵

大澤氏は此他尙ほ此類の書簡を藏する數十通の多きに上れり亦以て如何に兩箇の平生が親善なりしかを窺ふに足るべく、且つ文華が光琳の畫を求むるに方り、必ず先づ抱一の審定を経たることを知るべし、茲に掲ぐるもの如きまた其一なり、此畫は蘆荻蕭條たるの邊、一雙の鴻雁月下に逍遙するところを寫せるものにして、光琳の作中希れに觀る所の逸品なり、月は金泥を以て其周圍を塗抹し而して蘆雁と洲渚とは淡墨にて之を揮灑し以て、能く月下蕭々の景致を寫出せり、殊に其落筆の流暢にして秀麗なる、其墨氣の滋潤にして風雅なる、眞に寫生の妙筆を極め、且つ無限の情趣を發揮したるものと云ふべし、由來光琳は設色艶麗なる裝飾畫家として世に稱揚せらるるも、若し一たび此畫に對すれば、彼れが單純なる墨畫に於ても亦古今多く其比を見ざるの妙手腕を有したるを認識すべきなり



飛鳥圖(紙本墨畫)

(縦三尺六寸五分、横一尺六寸七分)

武藏國 大澤久右衛門君藏

茲に出す圖は既に飛び去て空に翔らんとするの鳥と將に飛び來て地に下らんとするの鳥を寫せるに過ぎずして別に何等の點景を用ひず意匠極めて簡素布局また超妙なりと云ふを得ざれども、僅々數箇の線條と數點の塗抹とによりて能く鳥鳥の眞髓を捉へ、加ふるに其筆路の流暢にして濃墨の秀潤なるに至りては實に光珠獨得の妙機を發揮したるものと云ふべし、聞く抱一嘗て人に語て曰く、光珠の著色や極めて艶麗なれども而も到ることを得べし、特り其秀潤なる濃墨に至りては遂に企及すべからずと、此數語は即ち能く前に出したる月下虛雁圖及び茲に出す飛鳥圖を評して餘蘊なきものと云ふべきなり



拾得子畫像(紙本淡彩)

(縦三尺七寸七分、横一尺六寸五分)

武藏國 大澤久右衛門君藏

此拾得子畫像、元來寒山子と共に雙幅のものなりしが、其一幅何時の頃にか散佚して傳はらざりしかば、抱一上人深く之を惜み自ら寒山子を補寫し、以て對幅とせしものにして、共に大澤氏の秘藏なり。抑寒山拾得は既に第一冊にも述べたる如く、風狂にして而も風狂にあらず、千古絶倫の散畫にして、其芳躅の風狂貧子に似たるものなれば、従つて其風狂状態を捉へ來りて之を毫端措表に發揮すること蓋し容易の業にあらず、故に古來の畫家屢之を試みたるも、能く其真面目を表現して遺憾なきものに至りては、甚だ妙し。唯、光琳の此畫や、筆路流暢にして墨痕秀潤なるのみならず、或は時々大笑し、或は嬉遊歌唄し、終日終年遊戯三昧に住したる散畫の風非を紙上に活躍せしめて、餘蘊なきものあり。吾人は此畫に對し、更にまた抱一が補寫したる寒山子を見るに、後者は明かに筆者が經營苦心の跡を存するに拘はらず、其用墨落筆より神韻氣品に至るまで、迥かに前者に及ばざるを認め、さすがに光琳の如き名人の在格には、何人も企及すべからざる妙味のあるに嘆服せざるを得ざるなり。





洋花
中花

維摩居士畫像(紙本墨畫)

(縦一尺二寸五分、横一尺八寸)

東京 別府金七君藏

維摩詰は支那語に譯して淨名と云ふ釋迦牟尼佛と時を同うし中印度の毘舍離城に住み所謂無生忍の悟を得て辯才無礙と稱せられたる居士なり其己を持すること極めて謹厳なりしのみならず日夕四衛に來往して衆人を提擧し正道に就かしむるを以て唯一の樂としたり居士嘗て其疾病に因み大乘佛敎の極致たる不二法門を宣説し維摩詰所説經三卷即ちこれなり是れより先き釋迦佛居士の病あるを聞き大目犍連富樓那優婆塞等の上足に命じて居士を訪問せしめんとせられしに彼等皆居士の辯才無礙なるを畏れて之を辭せしに由り終に文殊師利菩薩佛の命を奉じ多數の隨行者と共に居士を訪ひしに果して居士は訪者に對して難詰を試み三十餘の菩薩をして各自得の法門を説かしめし後文殊の反問に應じ默然無言を以て不二法門を示し文殊をして是れ眞の不二法門なりと讚歎せしめたりと云ふこれより後人この無言の説法を稱して維摩の默然無言の如しと云へり

茲に出す維摩居士の像は光琳の畫中最も磊落豪放の作にして筆力の強健なる墨痕の淋漓たる瀟灑雷霆を轟かせる老居士の神韻意氣躍如として紙衣に溢るゝを見る是の如きは光琳の如き大手筆にして始めて能くすべき所到底纖手弱腕の徒が企及するを得ざるところなり



扇面萩圖(紙本著色)

(縦六寸四分、横上裡一尺八寸九分、下裡八寸五分)

武藏國 大澤久右衛門君藏

茲に掲ぐるものは扇面に唯兩三株の萩花を描けるに過ぎずして光琳畫中に於ける優秀なる作にはあらざれども尙ほ彼れの筆致傳彩を見るべき好材料とすべきものあり抑光琳の作と稱せらるゝ所の六曲もしくは二曲屏風等の大作にして金碧燦爛人目を眩するもの世に尠からず而も吾人が材料をそれ等に採らずして却て此の如きの小品を茲に撰載する所以のもの他なし彼の多くは大抵魚目にして真珠にあらざりて而も非なるものなればなり斯くも光琳の眞品の極めて稀なる今日に在りては此畫の如き一小品と雖も大に珍とせざるべからず其落款の允正なるは言ふまでもなく花に於けるの描法殊に清秀にして些の匠氣を留めざるところ頗る光琳の眞面目を掬すべく傳彩また例に依つて鮮麗なり之を第一冊に掲げたる岩崎家の四季草花圖小屏風中の萩圖に比して毫も異なる所なしされば此一葉の扇面畫も亦以て光琳作品の試金石と爲すに足らんか

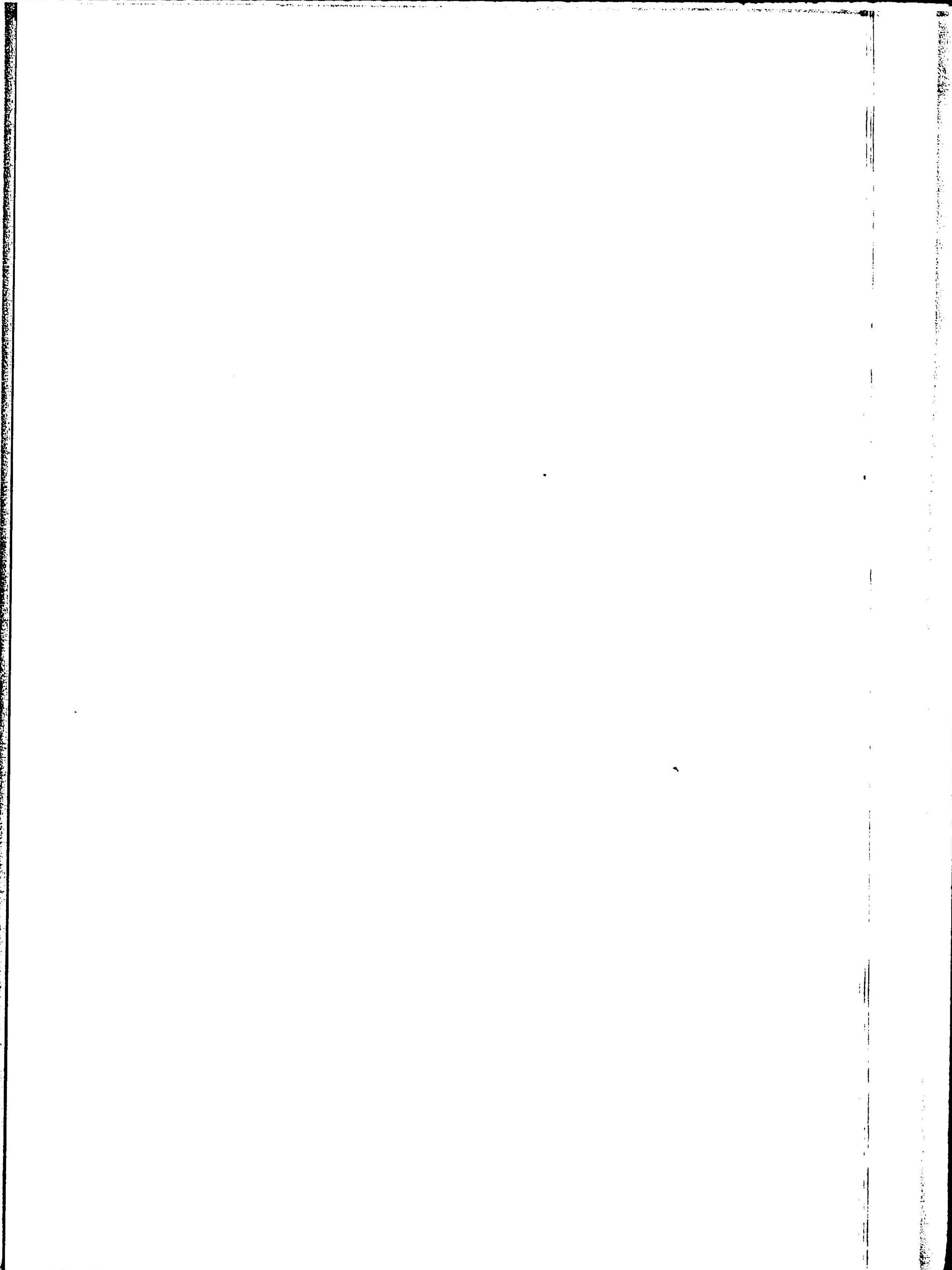


琴高仙人圖(紙本淡彩)

(竪四尺四寸五分 横一尺九寸三分)

東京 酒井正吉君藏

琴高は支那宋朝に於ける仙人にして能く琴を彈す、仙術を行ふて冀州(宣化府)涿鹿縣(天府)の間に浮遊すること二百餘年なりしが、後涿水に入て龍の子を取ら入るに先ち弟子等に約して曰く、當に某の日を以て還るべしと、弟子等其期に至り、深齋して俟つ、高果して金光の赤鯉に乗て水中より出で來り留ること一月去て復た水に入りしと云ふ、この畫は即ち此仙話に基き、琴高の鯉魚に乗て水中を出でたるところを圖せるものなり、由來琴高仙人の事迹は和漢古今の畫家が屢々揮灑したる所の題目なれども、概して千遍一律所即様に依て葫蘆を描くもの多し、然るに今此畫を觀るに、圖樣清新にして毫も古人の窠臼に陥らず、且つ其飛騰せる水態の描法頗る奇拔にして、衣服の線條に於ける筆致の流麗なる實に言はんと欲して言ふべからざるの妙あり、加ふるに仙人の相貌及び鯉魚の姿態の如き、おのづから生意あり、殊に其彩色は、衣服を黃土にて塗り、其衣端に群青を施し、且つ水體に少しく水青色を加へたるに過ぎずと雖も、全體の配合宜きを得て、氣韻また優逸、眞に光琳作中の優秀なるものなり、此幅畫て抱一の藏せしものにして、光琳筆、琴高之圖、秘藏之品に候得共、任御所望、御讓申候云々の添東あり、知るべし、彼れが平生愛玩秘重して措かざりし所の名品なることを

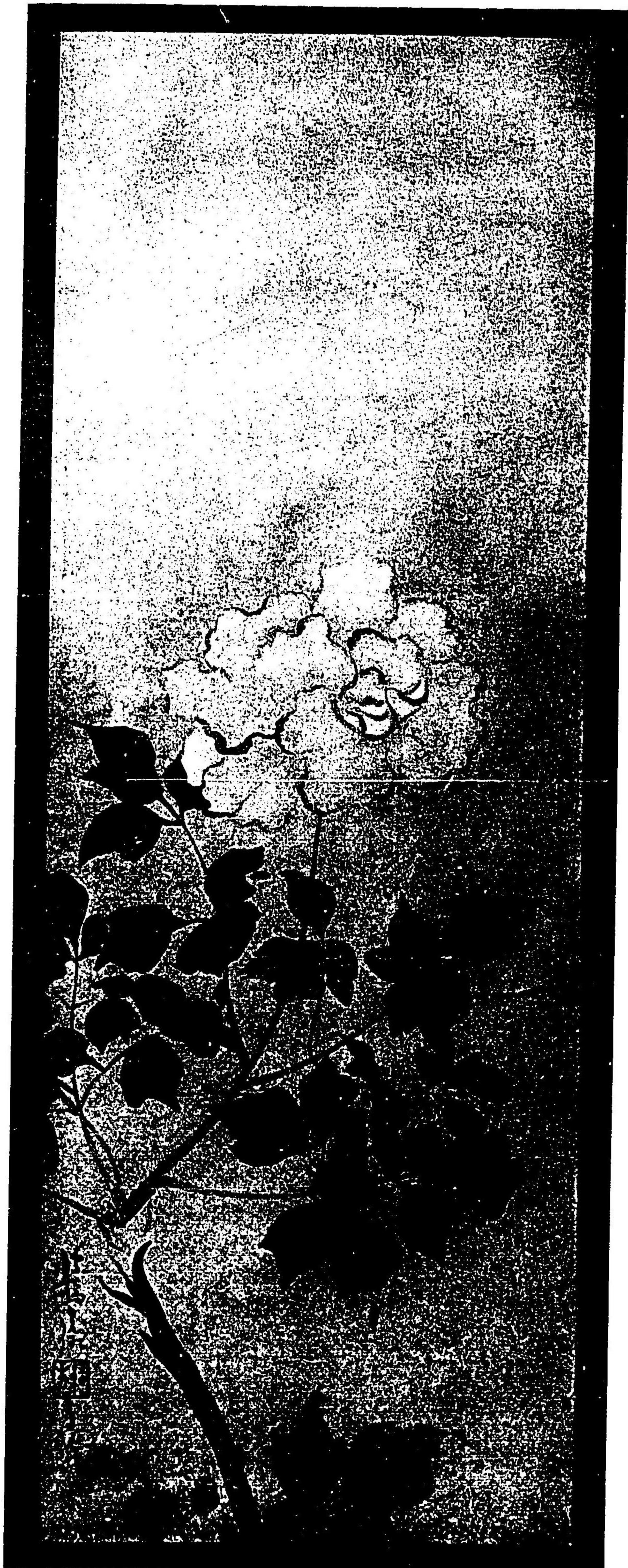


牡丹花圖(紙本着色)

(縦二尺五寸五分、横九寸四分)

東京 酒井正吉君藏

茲に出す圖は、輕々筆を揮つて一株の牡丹花を一氣に呵成せるものにして、其彩色の如きも、素に少しく綠青を點じ、花に薄く胡粉を施したるに過ぎず。之を第一冊に掲げたる加藤氏の牡丹花に比較するに、彼れは即ち妖艶にして、此れは則ち瀟洒なり。此畫や固より光琳作中の上乘とは言ふべからざるも、而も布局の清新にして、筆致の超脫なる到底尋常吮筆者流の夢想にだも及ばざる所ならん。

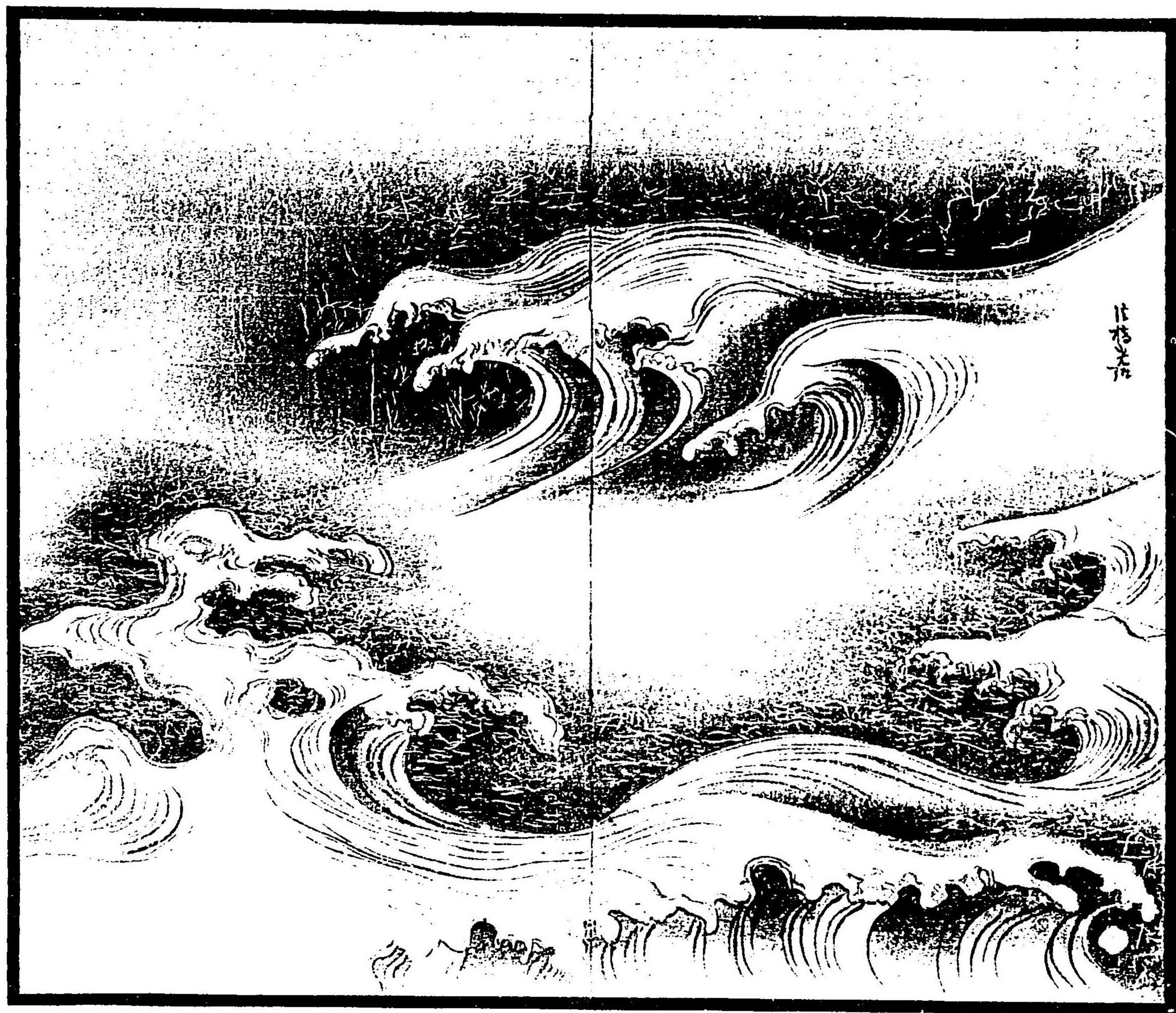


激浪圖二曲屏風(紙本金地著色)

(竪四尺八寸三分、横五尺四寸六分)

東京別府金七君藏

光琳は山嶽層疊たる景致を描くこと極めて稀れなりしに反し波濤流水の狀態を寫すこと頗る多かりしが如し而して彼れが變化極りなき非凡卓絶の技倆を窺はんと欲せば之を其波紋水態の畫に徴するに如くはなし彼れの斯種に關する作中或は溪流の潺湲たるあり或は江水の浩蕩たるあり或は細波の激澁たるあり或は激浪の澎湃たるあり而して時に模様を帯び又寫生の妙を盡す一々展し來ればいづれも其描法筆致を異にし殆んど箇々別人の手に成るの感あらしむ而も是れ悉く光琳一家の特調を發揮し變化錯綜の妙を現はすに至りては其筆鋒の端倪すべからざるに驚かざるを得ず試みに此圖を以て第一冊に出す佐竹家の棟成國津輕家の紅白梅園岩崎家の扇面張交屏風中の馬上人物圖巖浪圖及び梓舟圖等に於ける波浪流水に對觀せよ其變化自在なる描法に就きて無限の興趣を感ずべし今茲に掲ぐるものは寧ろ寫生に近きも其線條は何人も模倣すべからざるの妙あり殊に分子粗くして使用の最も困難なる群青を以て巧みに波濤の間を染抹したるが如きは恐らく光琳にあらざれば能はざる所ならん洵に珍賞すべき一名品なりとす本書表紙の模様は即ち此激浪圖を模寫して應用したるものなり





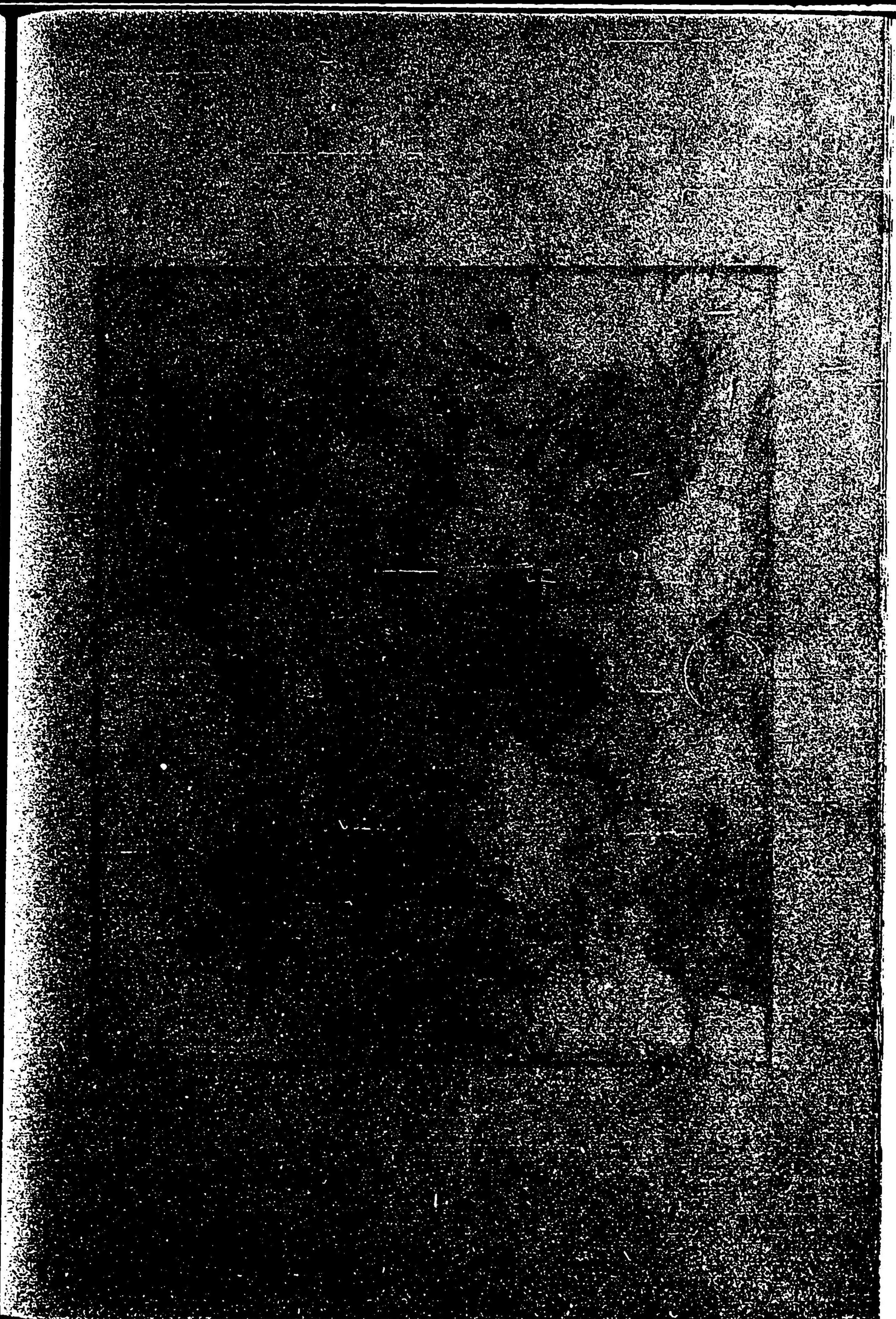
三十六歌仙圖二曲屏風(紙本著色)

縦五尺五寸横六尺

侯爵佐竹義生君藏

三十六歌仙とは、一條天皇の頃大納言藤原公任が古今の歌人中より撰抜せしものにして、即ち柿本人麿紀貫之凡河内躬恒伊勢大伴家持山邊赤人在原兼平僧正遍照素性法師紀友則發丸大夫小野小町藤原兼輔藤原朝忠藤原教忠藤原高光源公忠壬生忠岑徹子女王中臣類基藤原敏行源重之、源宗千源信明藤原清正源順藤原興風清原元輔坂上是則藤原之興藏人左近藤原仲文大中臣能宣壬生忠見平兼盛中務是れなり蓋し此等の歌仙は孰れも天地を動し鬼神を威せしむと稱せられたる和歌の名人にして古來畫家の好題目なれば光琳以前これを描きたる者擧げて數ふべからず然れども大抵土佐流の常套に拘泥して、未だ此圖の如く意匠の磊落奇異にして布置配合の巧妙なるものを見ざるなり抑光琳の光琳たる所は、一花一葉の微を寫すに方りても尙ほ能く多少の新意を顯出するに在り、而して此圖の如く最も變化に富み且つ意匠の慧拔なるものは彼れの作中に在りても其比少なしと云はざるべからず試みに看よ三十五個の歌仙巧みに一幀中に安排せられ個々の相貌よく個々の精神を顯はせる間にありて他の一仙即ち徹子女王は特に之を畫面に出さず、單に几帳のみを描きて隠約の裡に女王の面容を勞隸たらしむるが如き光琳にして始めて能く這般の妙想を發揮することを得べし又其色彩の如きはおのづから配合の妙に富み毫も俗塗を帯びず眞に非凡の傑作と稱すべきものなり



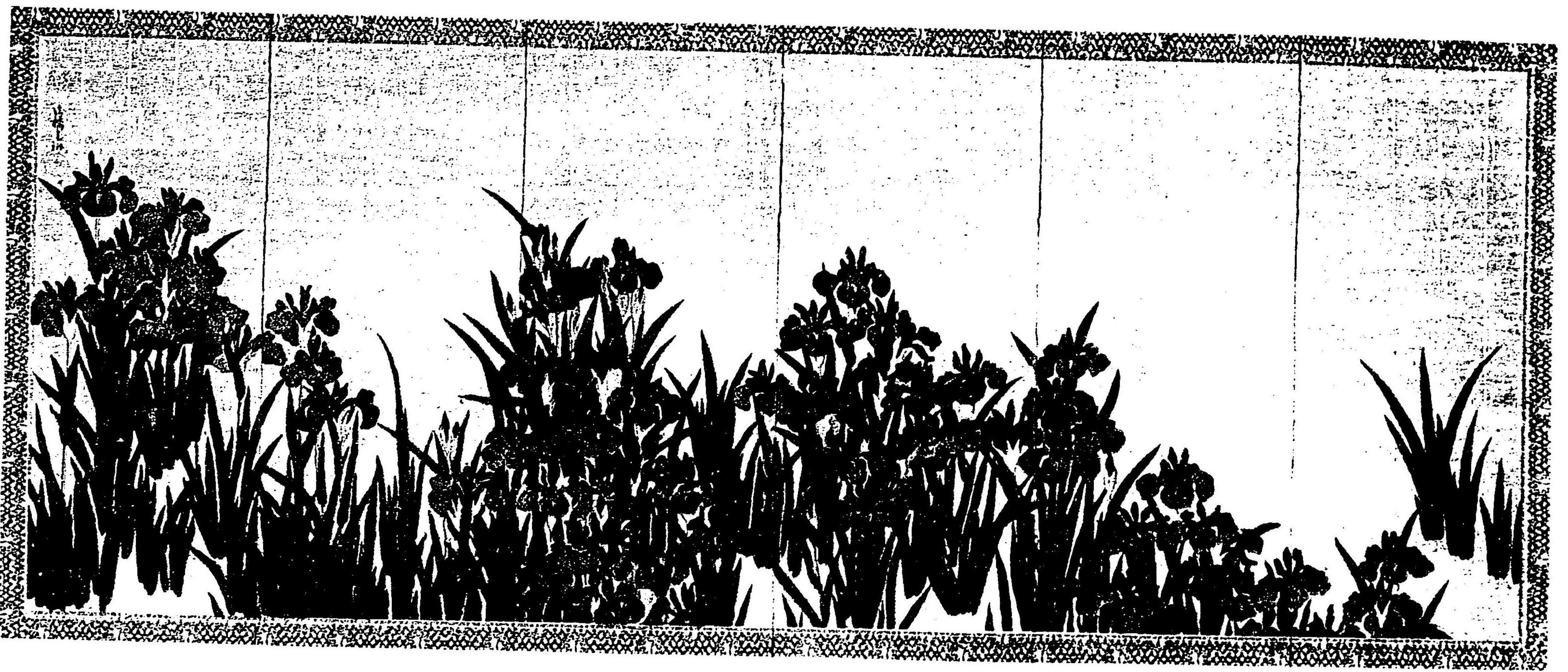


燕子花圖六曲屏風一雙(紙本金地著色)

(各幅四尺九寸八分、横一丈一尺七寸八分)

京都 眞宗本願本山本願寺藏

既に展記載したるが如く、尤琳は頗る花卉を畫くに長じたりしが、就中燕子花を寫すこと最も多かりしが如し、而して茲に出す六曲屏風の如き大作は數多ある畫中にも希有の名品にして、圖に於て見るが如く、金地に無數の燕子花のみを寫出し、而して其設色は單に群青と緑青とを以てしたるの外、更に他の彩具を交へざるも、筆致微妙艶麗にして、金碧燦爛入目を眩するの觀あり、蓋し石青及び石緑の如きは、彩具中最も高價にして、又最も使用し難き粗硬の粉料なり、然るに此二種の粉料を、毫も脚跡顯慮する所なく、斯く潤澤に且つ斯く精巧に使用したるものは、古今東西の畫家中、吾人の未だ曾て其比を見ざる所なり、彼れが裝飾畫の大家として、世界に重視せらるゝ、所以蓋に偶然にあらずと云ふべし。





松竹梅圖狀紗(繪子著色)

(縦二尺四寸四分、横二尺三寸八分)

武藏國 大澤久右衛門君藏

茲に出すものは繪子の歌紗にして、光琳が當時名門の爲めに特に筆筆を揮ひたるもの、一なるべし、其書く所は古來祝儀に慣用せる松竹梅を寫したるに過ぎず、圖様極めて單純なれども、亦是れ光琳の眞面目を窺ふべき一材料たるのみならず、元祿時代に於ける歌紗の好標本として特に珍重すべきものなるべし、其畫局の秀拔にして、落筆の輕尙なる、一種言ふべからざるの妙あり、また傳影の如きは頗る瀟洒にして、松の枝幹に朱土を施し、其葉に草綠を塗り、梅花の葉に少しく雌黃を加へたるの外、其他はすべて濃淡の墨汁を以て揮灑せり、之を第一冊に掲げたる紅白梅圖及び四季草花圖等の濃彩畫に比較對觀するに殆んど別手に出づるの觀あり、其技倆の變幻自在なる、眞に驚くの外なきなり

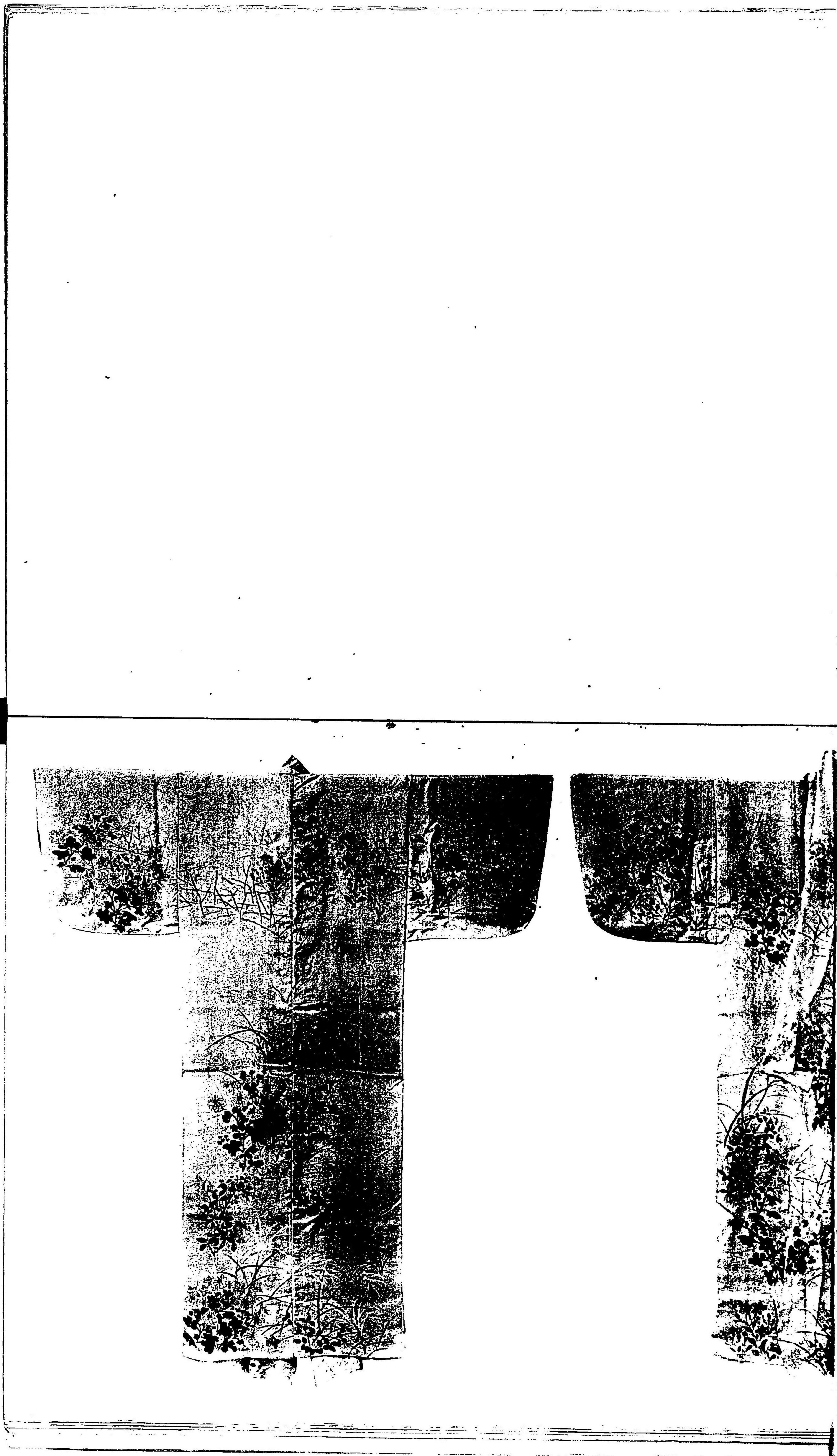


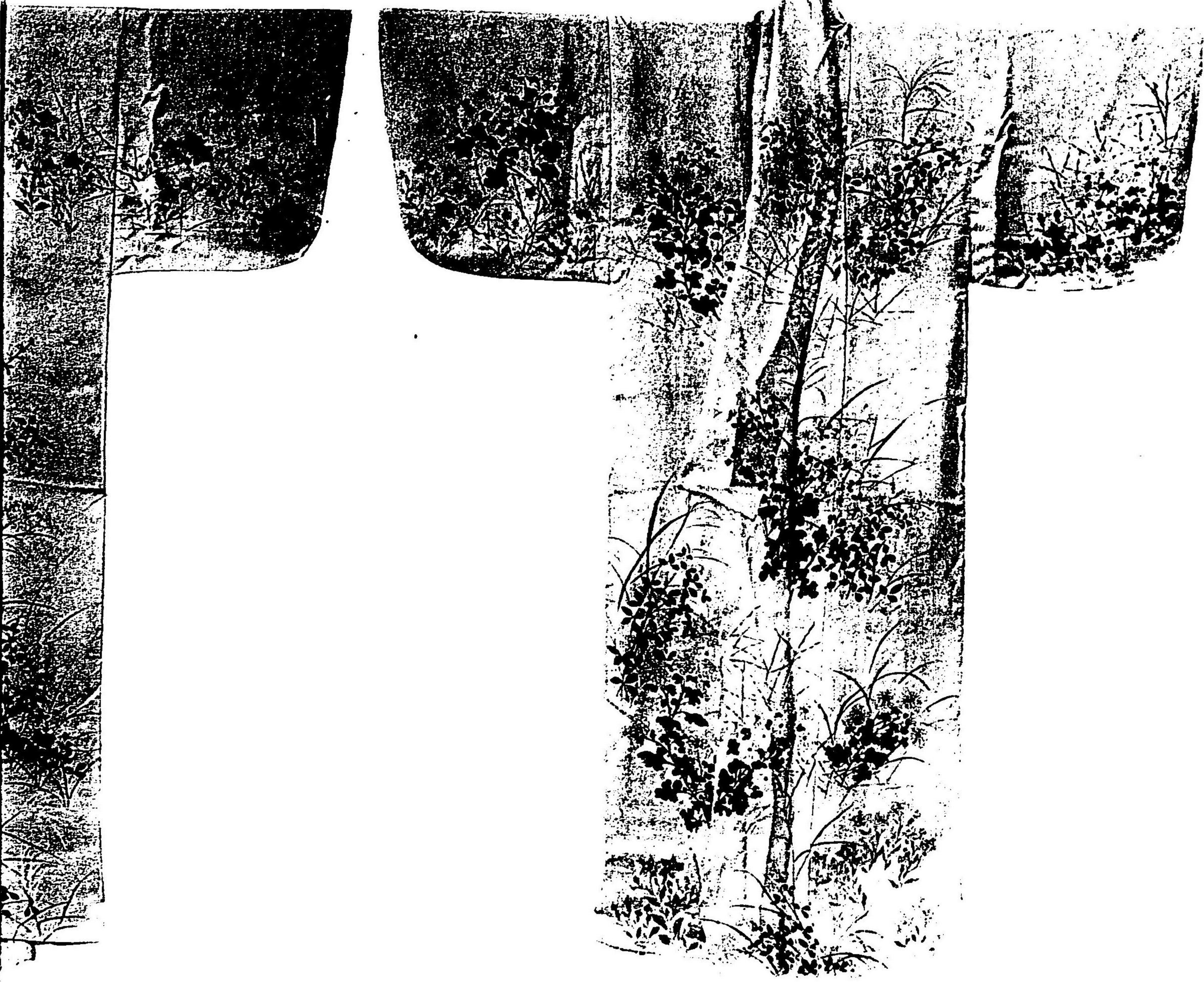
秋草模様衣裳綾地著色

(天端三尺九寸二分、幅一尺四寸六分、袖丈一尺一寸二分)

東京帝室博物館蔵

茲に出す小袖は今や帝室博物館の所蔵に歸すれども元來江戸深川の冬木氏に傳はりたるものなり冬木氏本姓は上田遠祖五郎左衛門直次上野國より出でて江戸に來り日本橋茅場町に店舗を構へて材木業を營みしが漸く盛運に向ひ其子五郎左衛門政親の代に至りて商業益繁昌し遂に江戸屈指の大商賈となり政親商務を帯びて屢京都に往來せしが元祿十六年五十一歳にて彼地に歿す政親の子彌平次政郷また父の業を繼ぎて一層家運を進め深川萬年町に壯大なる別墅を建築せり後茅場町の本宅回祿の災に罹りしかば爾後此別墅を以て本宅とせしものにして今の冬木町の在るところ即ち是れなり尤琳齊て京都を追放せられて江戸に下るや即ち萬年町なる冬木氏の別墅に寓し其間同家の爲めに靈腕を揮ひたるもの頗る多く隨て維新前後に至るまで同家の所蔵したる光琳の遺蹟は實に夥多なりしと云ふ茲に出す小袖の如き乃ち亦其一遺物なり想ふに是れ彼れが政親又は政郷の妻女の爲めに揮灑したるものなるべく而して此小袖と共に現に博物館に保存せらるゝ下圖に就て見るも此畫が草率の作にあらずして經營苦心を重ねたるものなるを知るに足る其地質は綾にして菊萩桔梗莎草等の秋草を描き彩具は金泥胡粉草綠等を用ひたるに過ぎざるも其布置按排の秀拔なる其落筆の暢快なる其傳染の高雅なる眞に元祿時代に於ける小袖模様の最好標本なるべし蓋し當時一般の風尚頗る華奢に傾き豪家富商相競ふて錦繡輕羅を競ひ互に其善美を誇りしならんも絶代の名人光琳をして其畫筆を揮はしめたる所の綾衣を着けし者は恐らく冬木氏の妻女一人なりしなるべく夫の錦繡輕羅の美も此れに對しては敢て誇るに足らざりしならん吾人は茲に其衣裳を前後兩面より撮寫したるものを掲げて全體に於ける意匠構思の妙を示し別に小袖の前面を大寫し且つ原品と同じき綾地を用ひて之を色摺に附し以て流麗輕妙なる筆致と高尚優雅なる傳彩の一斑を示せり覽者もし此れによりて全豹の筆致傳彩の高妙なるを領得せば編者の苦心また空しからずと云ふべし







黄山谷圖陶盤

(高九寸徑七寸三分)

東京帝室博物館藏

黄山谷名は庭堅字は魯直山谷は其號なり支那北宋英宗の治平中進士に登第し太和其他の諸縣に
知たりしが後漢に遇ひて罪を得崇寧四年疾を以て卒す南宋の高宗追慕して文節と號す蓋し宋朝
上下數百年文學頗る旺昌を極め詩文を以て一家を成せし者固より夥からざりしと雖も就中黄山
谷の如きは殊に一代の詩宗を以て稱せられたり茲に出すものは古來黄山谷を圖したるものと傳
へらるゝも其畫意詳ならず意よに或は山谷が山籟照影空自愛孤聲舞鏡不作雙天下真成長台合爾
幾相倚睡秋江と吟せし一篇の詩意を揮瀟したるものならんか落筆極めて卒略なれども趣味津津
として頗る光琳の眞面目を掬すべきものあるを覺ゆ
此陶盤は乾山の製作にして光琳これに描畫したるものなり盤の全體白釉を塗り而して書畫とも
に黒釉を以てせるところ第一冊に出せる福岡子爵の龜甲形陶盤に於けると姿も異なる所なした
底の裏面に左の如き款識あり乃ち是れ彼れが未だ京都に在りしときの作なることを知るべし

又日本國陶
者雍州黃山
陶德源有製
千所屋尚古堂



八橋硯筥

（高四寸五分、横九寸、横六寸五分）

東京帝室博物館藏

既に第一冊團扇面橋燕子花圖の説明中に述べたる如く昔在原業平朝臣三河國八橋に至りけるとし澤水八方に分ちして溝渠を成し各溝皆一橋を架し且つ其渠中燕子花水面を蔽ふて咲き亂れ頗る美觀を呈せしこと伊勢物語に見えたり茲に出すものは即ち意匠を此物語に取りたるものにして八橋硯筥と稱し古來頗る有名なるものなり其製作は之を二重と爲し上を淺くして硯筥とし下を深くして料紙入とし而して全體黒漆地に金泥を以て燕子花の莖葉を描き花は青貝を嵌入し橋は鉛を用ひ代は銀を填しまた内部には金泥を以て波紋を現はしたり其粗硬の材料を自由自在に使用したるの技備實に驚嘆の外なく且つ其巧を求めずしておのづから巧なる處一種言ふべからざる高雅の趣あり光琳が繪畫のみに止らず髹漆の技に於ても亦能く後世の爲めに高く標置せらるゝもの尙に所以ありと云ふべし

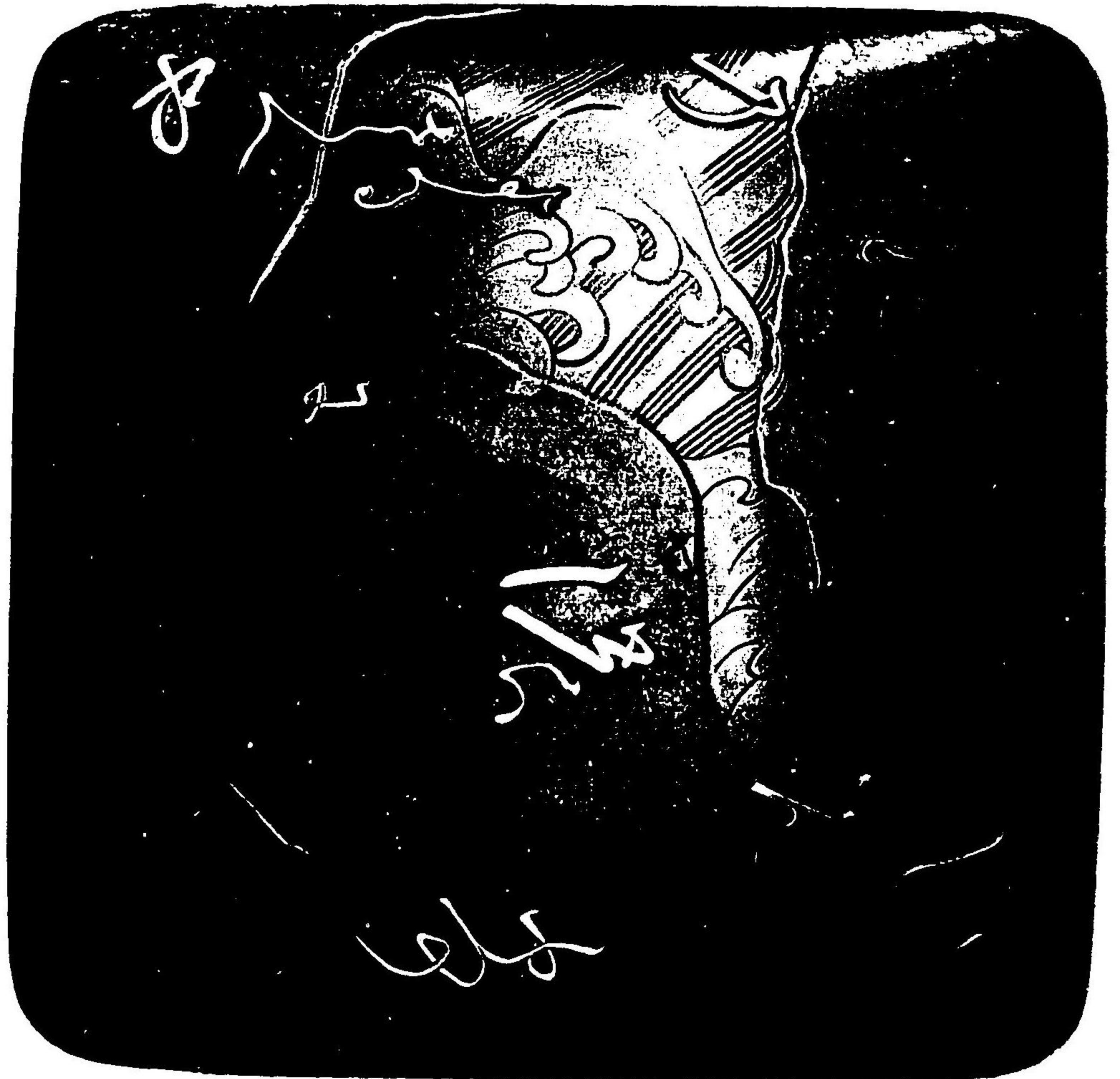
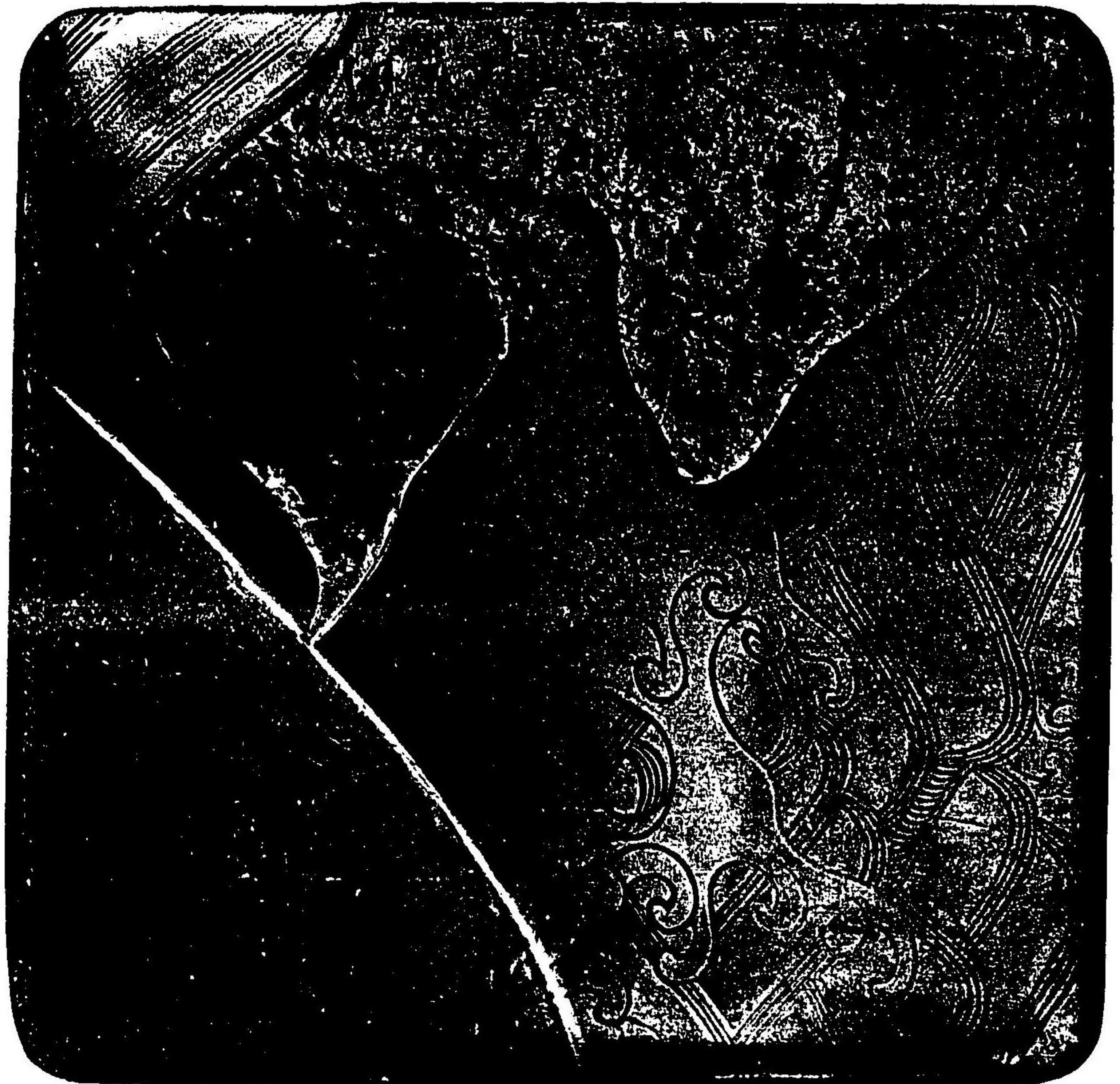


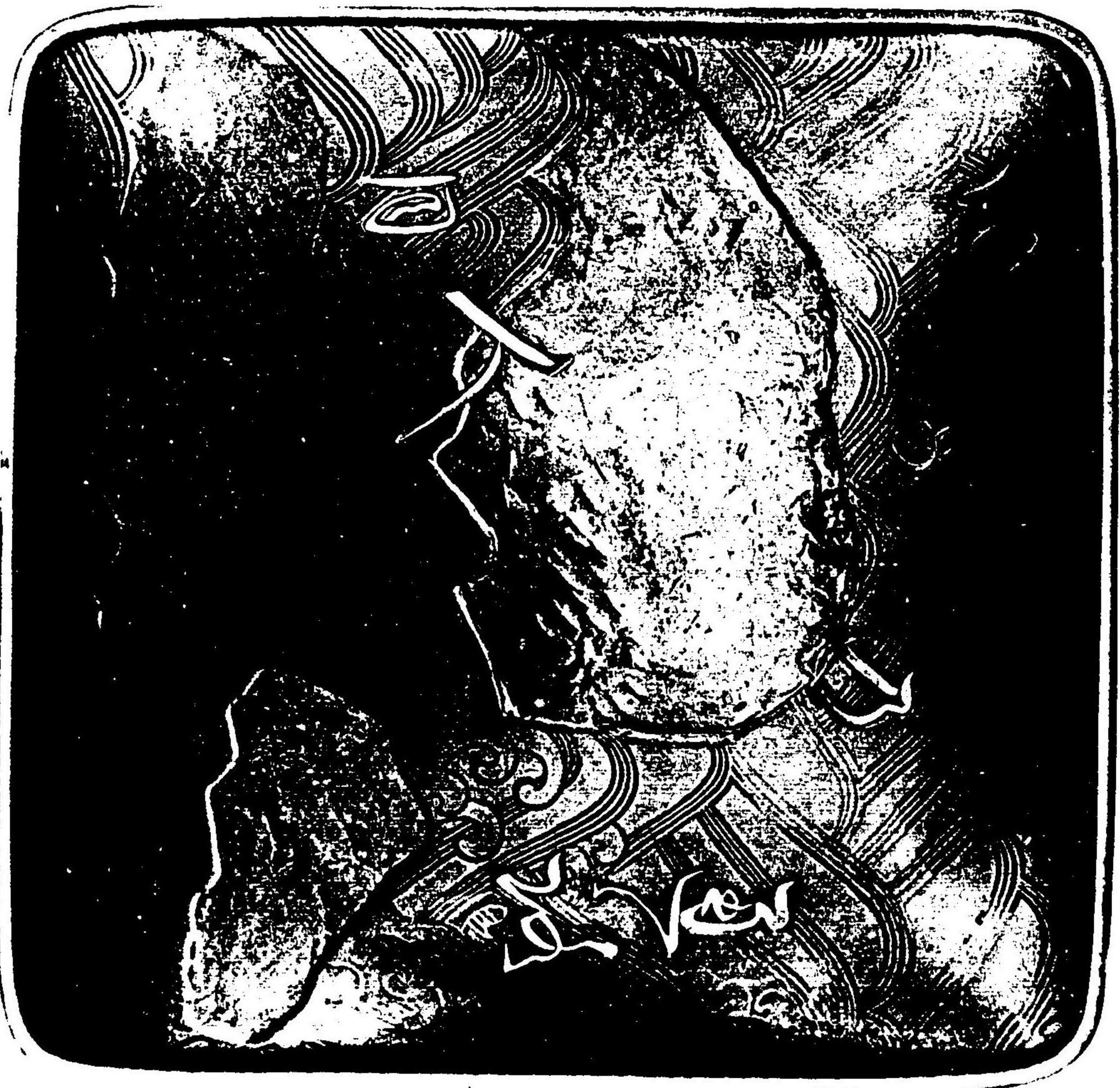
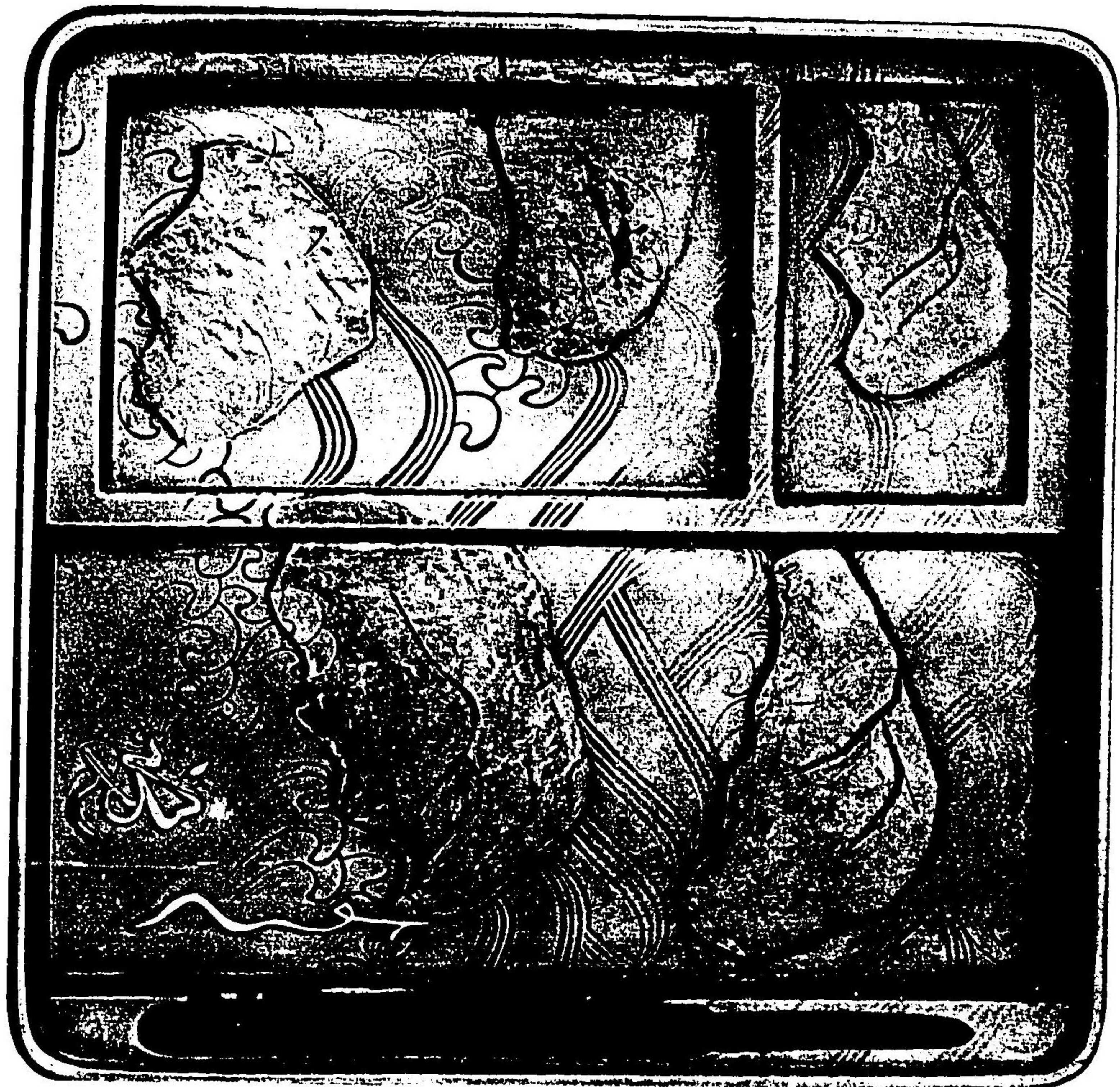
住江硯宮

(直径八寸一分、横七寸六分)

男爵岩崎彌之助君藏

註に出す硯宮は藤原敏行朝臣延喜七年卒す或は云ふ昌泰四年なりとが宇多天皇の御宇、さ
いの宮の御歌合に於て藤津の勝地住江を題として詠める有名なる戀歌住江の岸に寄る波よ
るさへや夢の通路人目よくらむの一首に因み非凡の意匠を凝らしたるものなり第一圖は其
蓋の表面と蓋の底面を寫したるものにして第二圖は蓋蓋の各内部を寫出したり其蓋は高く
凸起して丘状を成し宮の全體には金泥を以て波を描き又處々に鉛を填して岸と爲し銀を嵌
入して歌句を現はしたるが其歌句中故らに岸波の二字を脱してこれを全體の圖によりて表
顯し以ておのづから住江の意を寓したるどころ其構思の秀抜にして常匠の及ぶべからざる
を見るべく且つ鉛及び銀に於ける使用法の巧妙なるのみならず殊に注目すべきは波に於け
るの描法なりとす其線條は黒漆を以て之を金地に描出したるにあらすして黒漆地の上に金
泥を塗り而して線條は塗り残して之を顯はしたる所謂黒地上繪なるに拘はらず輕衡なる筆
致の大に見るべきものあるの妙處は光琳の如き命世の大手腕を有するものにして始めて能
くするを得べく到底平凡漆工家の企及すべき所にあらざるなり此硯宮は外箱の蓋に鷹峯大
座庵住物光悦造以寫之法橋光琳の款識あり乃ち是れ光悦の作品を模したるものにして嵌
入せる字體の光悦風なるも之れが爲めなることを知るべく其光琳が創意の作にあらざること
勿論なれども材料の使用自由自在にして技工の超凡卓絶なるに至りては洵に出藍の譽あり
と云ふべく時繪に於て光琳の名聲却て光悦を凌駕するもの決して偶然にあらざるなり





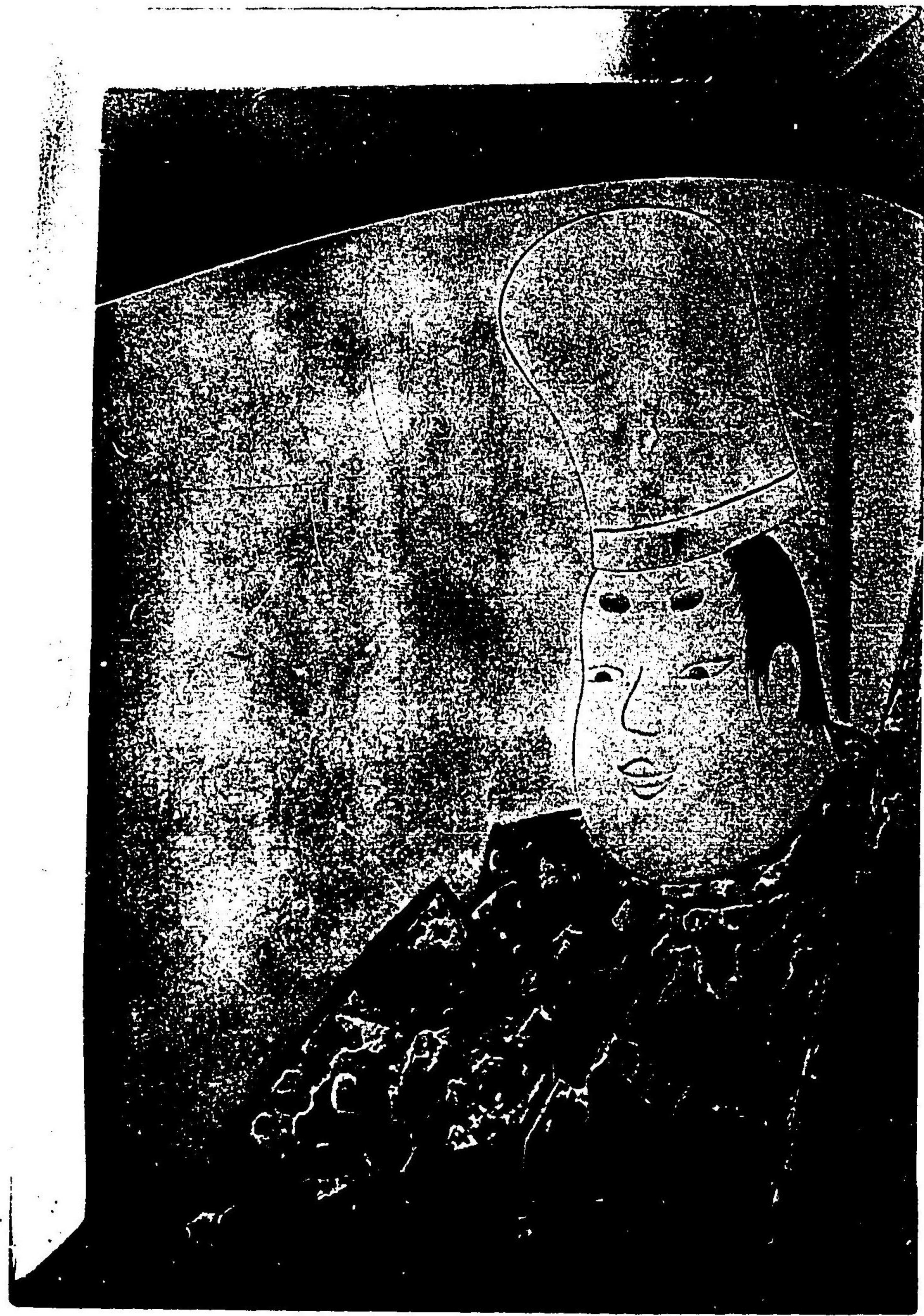
業平硯筥

高一寸二分、重九寸一、身幅六寸五分

東京 柴田令哉君藏

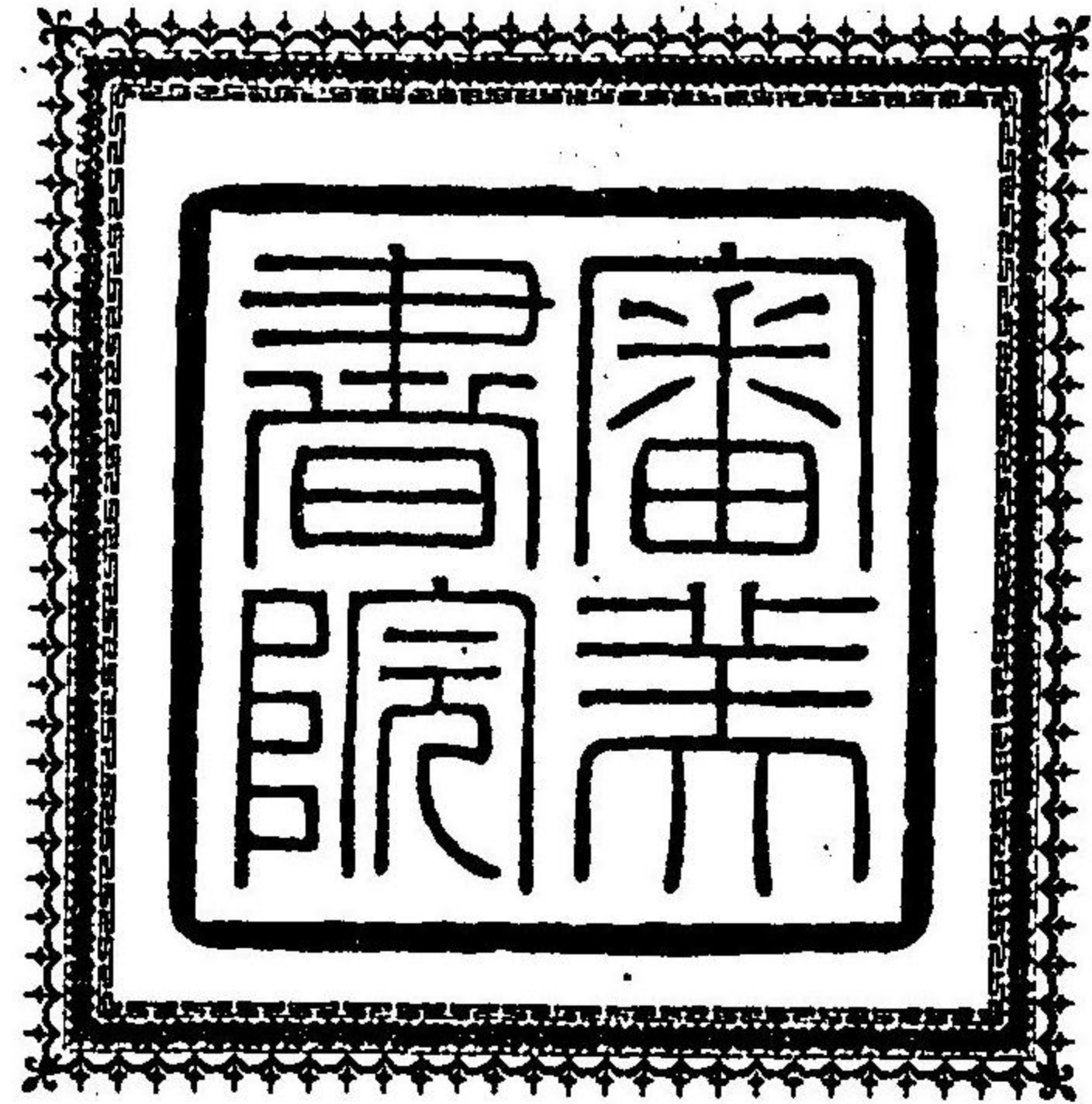
在原業平朝臣は既に記載したるが如く平城天皇の皇子阿保親王の第五子なり、天長中、兄行平と共に在原の姓を賜ひ貞觀中、右馬頭に任ぜられ、左近衛中將と爲る故に世稱して在五中將といふ。元慶中、兼相模美濃權守を經、同四年五月廿八日卒す。年五十六。業平體貌閑麗にして、放縱拘はらず、また最も和歌に長じ、後に三十六歌仙中の一人に數へらるゝに至れり。嘗て武藏に遊びて、隅田川に至り、波間に浮游する水鳥を見て、その名を里人に問ふ、曰く、都鳥と、乃ち悽然として懷を國風に遣りて曰く、名にし負はばいざ言問はむ、都鳥わが思ふ人はありや、無しやと、二世傳へて絶唱と爲せりと云ふ。

茲に掲ぐるは硯筥の蓋のみなれども、今其全體に就て略説せんに、蓋より盒の三方にかけて、扇面を描出し、これに業平の半身を現はせり。筥の總體黒漆地にして、金泥を以て扇面を塗り出し、朱漆を以て骨を描き、更に金泥にて其縁を取れり、而して業平の顔面は、夫の住江硯筥の波線に於けると同じく、金泥にて黒漆地を塗り残したる所謂黒地上繪なれども、其筆致大に見るに足るものあり、是れ實に我が光琳の特長にして、秀拔なる意匠と相俟て頗る珍賞すべきものなりとす。柴田令哉氏の父故是眞翁、明治二十四年七月十三日、八十五歳にて歿すは、畫家にして、詩繪工を兼ね、帝室技藝委員たるの名譽を荷ひし大家なりしが、深く此硯筥を愛藏し、是の如き卓拔なる黒地上繪は、光琳にあらざれば、畫き能はざるの妙技なりと嘆賞して、惜かざりしと云ふ、洵に偶然にあらざるなり。



明治三十七年二月十五日印刷
明治三十七年二月二十日發行

不許複製



發行所

東京市下谷區二長町五十二番地

審美書院

電話下谷一一二六番

發行者

田島志一

東京市上京區南壽寺町三十三番地

印刷者

梶間春三

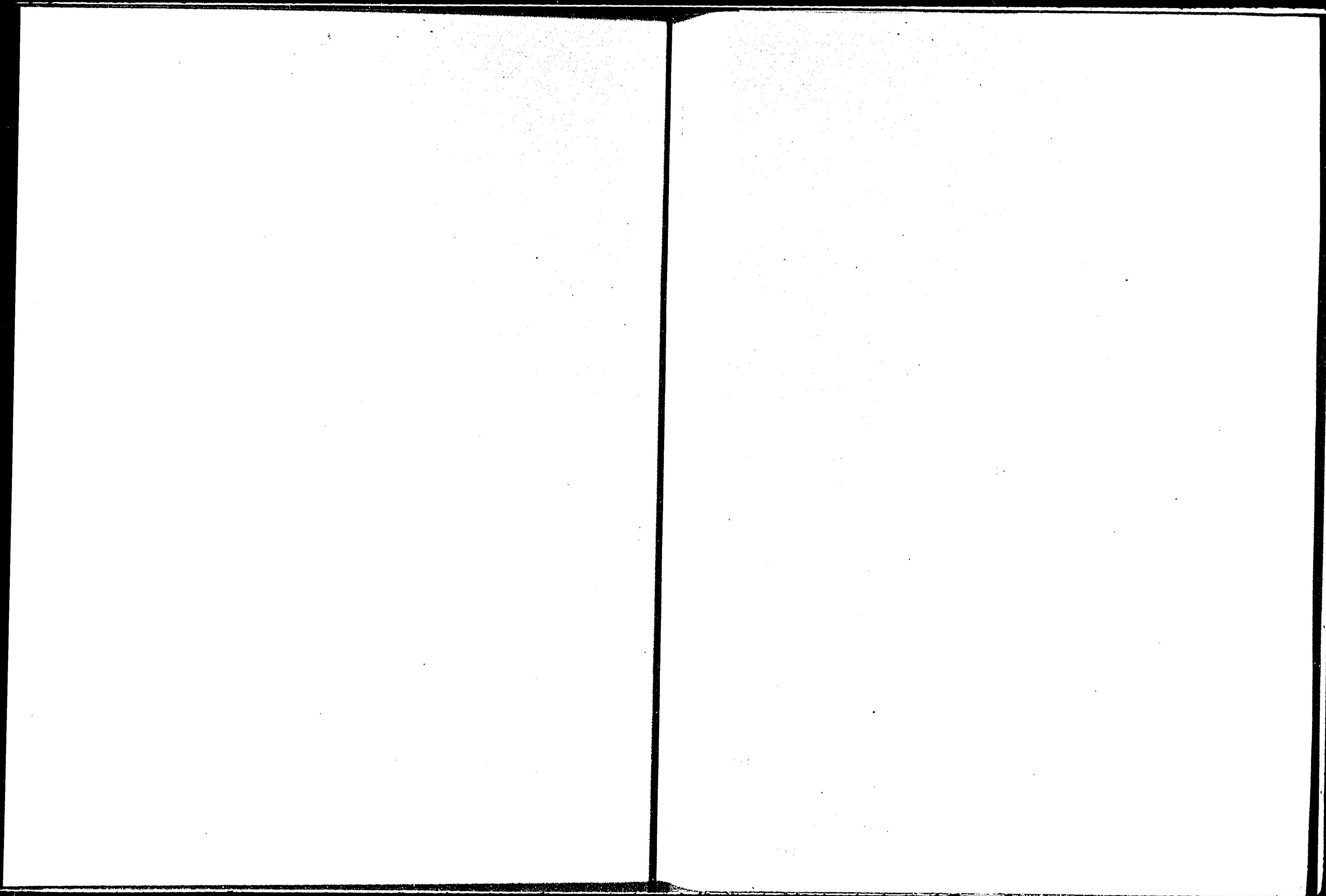
東京市下谷區二長町五十二番地

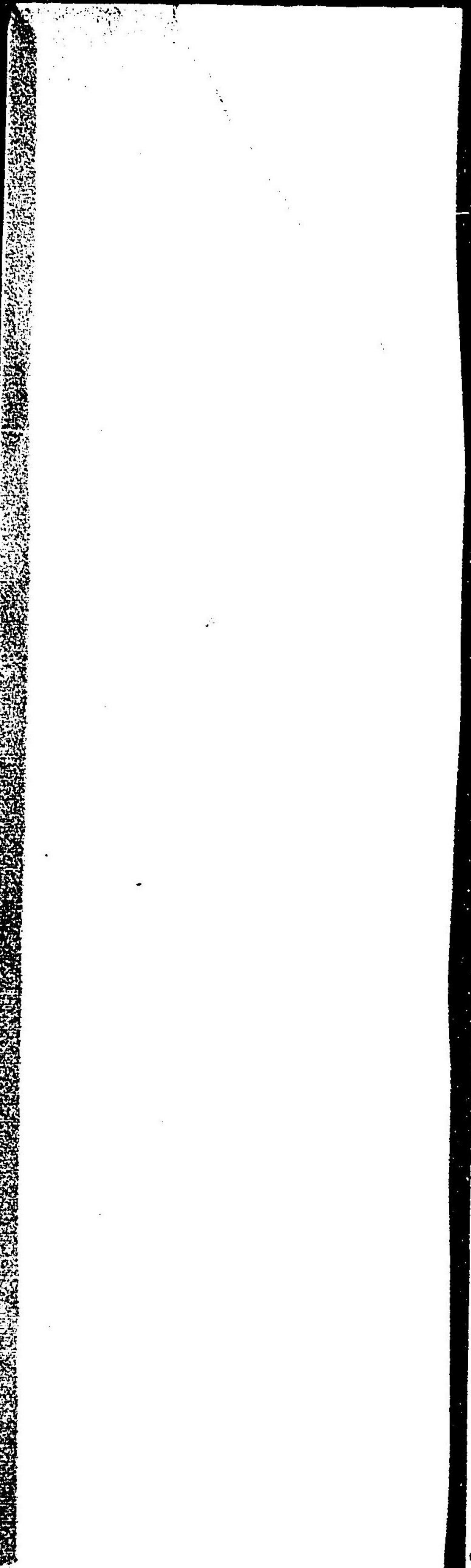
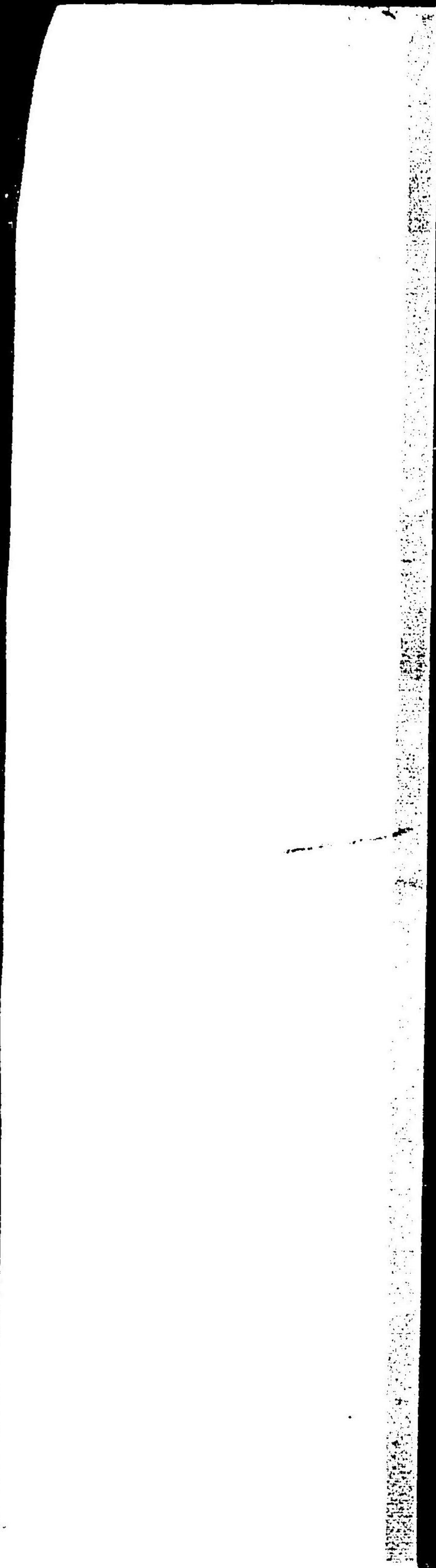
活版印刷所

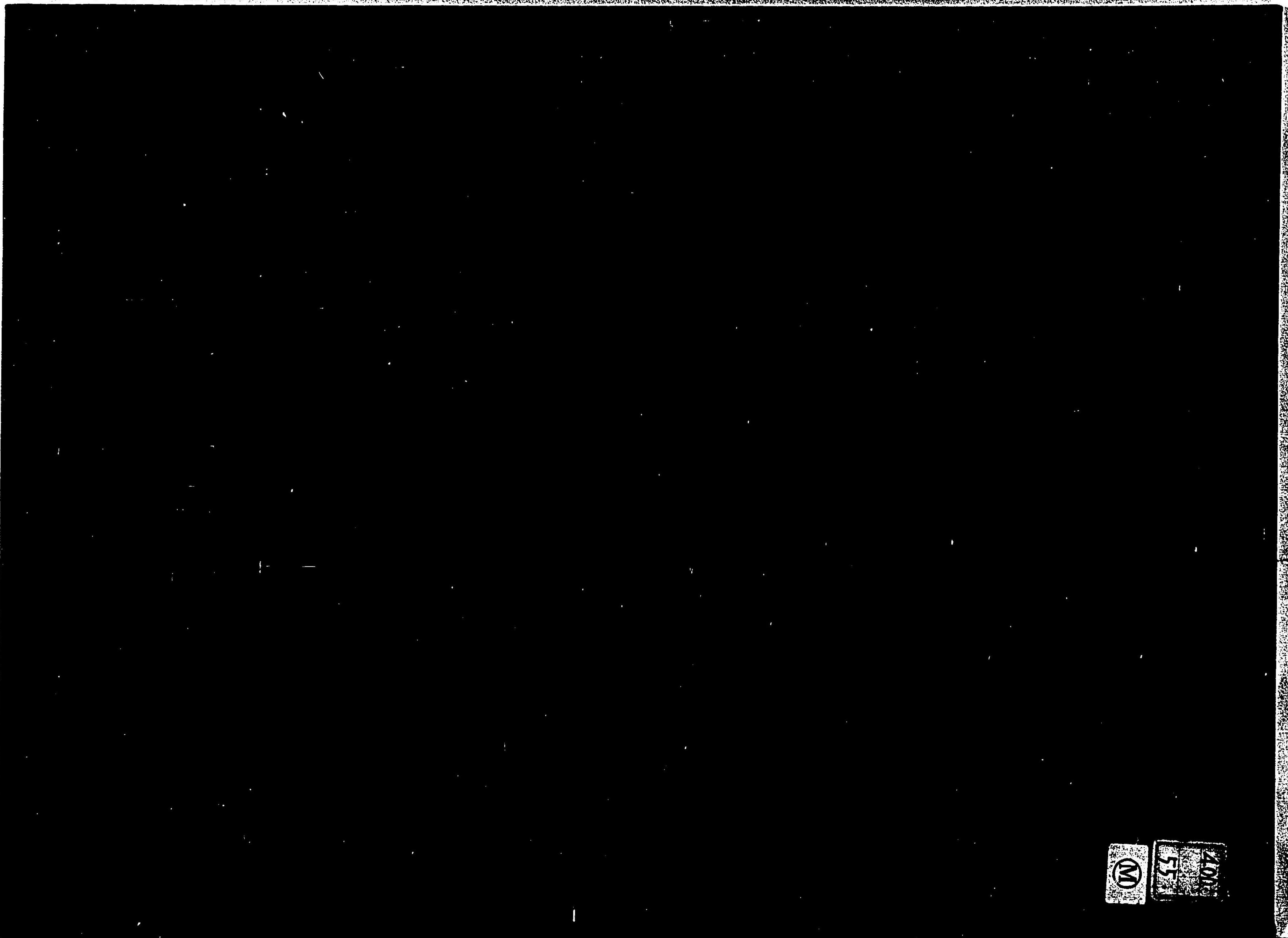
東京市京橋區築地二丁目十七番地
東京活版印刷所

IT40-18









2100
55
M

